

フコッペ洞窟・岩面刻画の総合的研究

(課題番号 10410017)

平成10年度～平成13年度科学研究費補助金(基礎研究(回(1)))研究成果報告書

資料

平成14年5月

研究代表者 小川 勝

(鳴門教育大学学校教育学部 助教授)

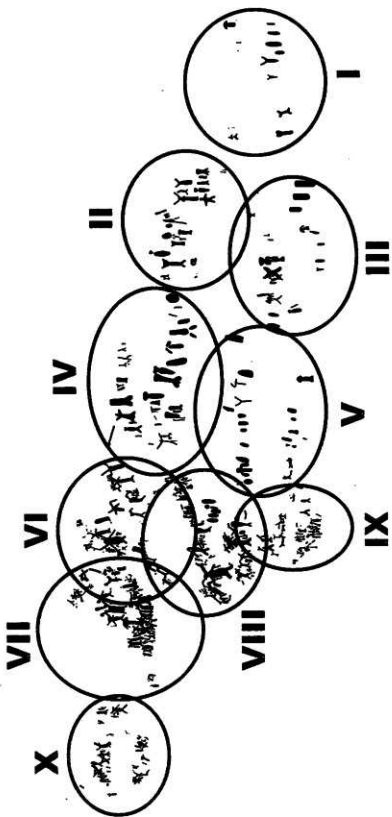
資料集 はしがき

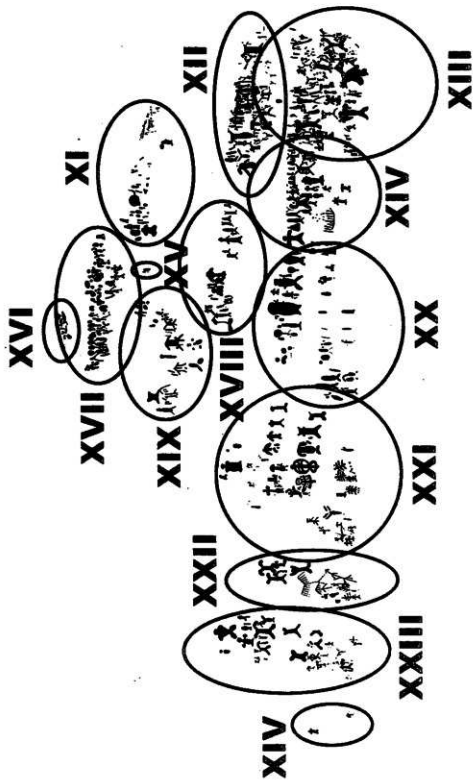
この資料集では、フゴッペ洞窟において発見された岩面刻画全体を、本文編では18としているが、その後便宜的に24のセクションに分けることにした。1970年刊行の『フゴッペ洞窟』（フゴッペ洞窟調査団編・ニューサイエンス社）に添付されている実測図と同様に、10分の1の縮尺の図面を作成する場合、岩面の形状でだまかに区分した上で、A4版各1ページに収まる範囲で区切った結果、24に分けることになった次第である。もとより、岩面画は、自然の岩面を特に枠取ったりすることなく連続的に制作されるものであり、それをどこかで区切ることに積極的な意味づけはできないことになる。また、岩面画が制作されるのは必ずしも平面的な場所とは限らず、様々な方向に向いている岩面を、平面的な紙などの上に正確に再現することは不可能であり、そういう意味でも、岩面刻画全体をセクションに区切ることは便宜的な意味以上のものはないということをはじめに注記しておきたい。

ただし、各セクションでは、画像ひとつひとつに固有のナンバーを付しており、作品の固有番号は、各セクション内での順番となっている。通し番号も付けているが、本資料編で、それぞれの作品に言及する場合は、セクションごとの固有番号によるものとし、その点では、セクションには一定の意味があるともいえるだろう。

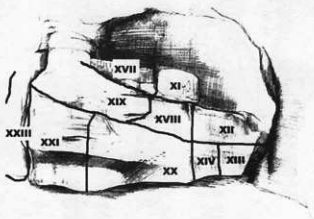
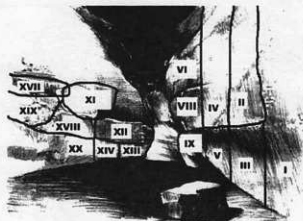
各セクションがどのように区切られているかは、次の2ページにわたるセクション配置図を参照していただきたい。それぞれのセクションはだまかに楕円で囲まれており、そのそばに付してあるローマ数字が各セクション名となる。また、本来3次元的な岩面上の各セクションが、それぞれ大体どのようなトポグラフィックな関係にあるかは、その後の2ページにわたる6枚のデッサン上に付したセクション番号を参照していただきたい。これも、岩面刻画の制作されているフゴッペ洞窟という場所が、どのような雰囲気を持っているのか知るには十分なものとはいえないが、大体の見当はつけられるだろう。なお、もともなったデッサンは、北海道教育大学大学院（札幌分校）に在籍しておられた、浅田聡氏の手になるものである。

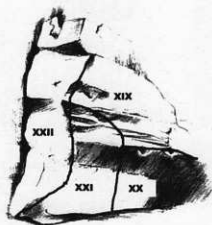
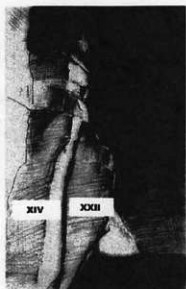
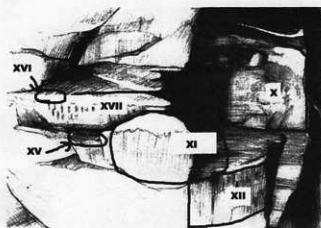
図面に続いて、「カタログ」をセクションごとに掲載している。詳細は最初のページにある「凡例」を参照されたい。各作品の下絵作成に関しては、鳴門教育大学美術史研究室卒業生の堤亜彩子氏にお手伝いいただいた。また各セクションの性格と特筆すべき作品に関してはnoteに簡単ながら記述した。「石膏型カタログ」の後のリスト作成には、共同研究者の土谷昭重氏の他にも多くの方々のご協力を得た。さらに「補遺」「注」「参考文献表」をこの資料集には含めた。「索引」は割愛したのでご丁承りいただきたい。



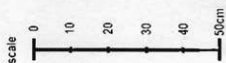
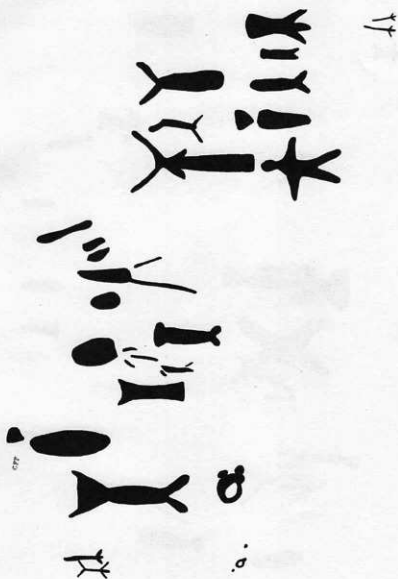


Sections

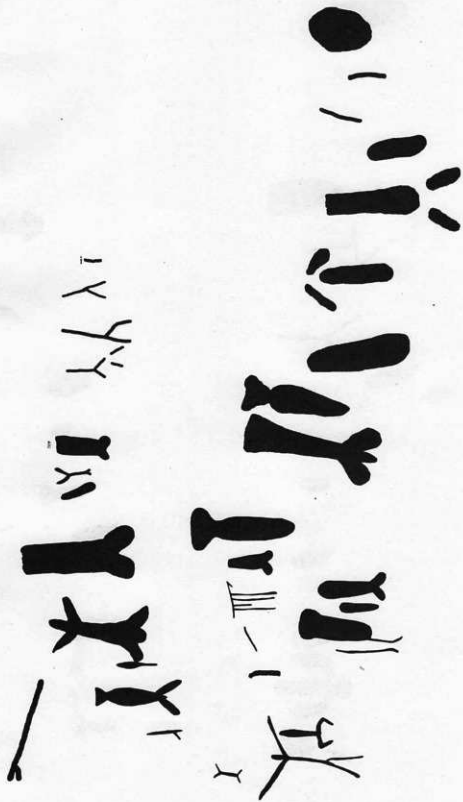






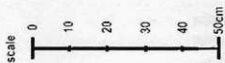


IV

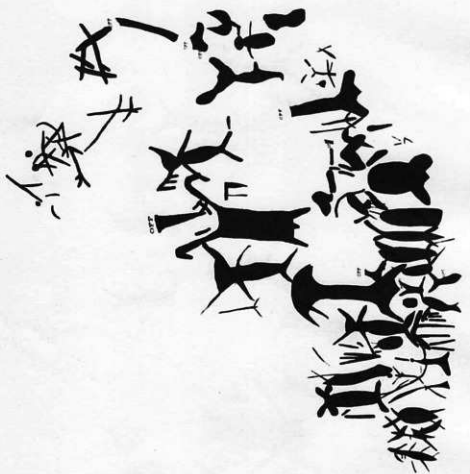


scale 0 10 20 30 40 50cm

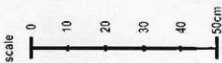
VI



VII



VIII



IX



X



scale
0 10 20 30 40 50cm

IX



XII



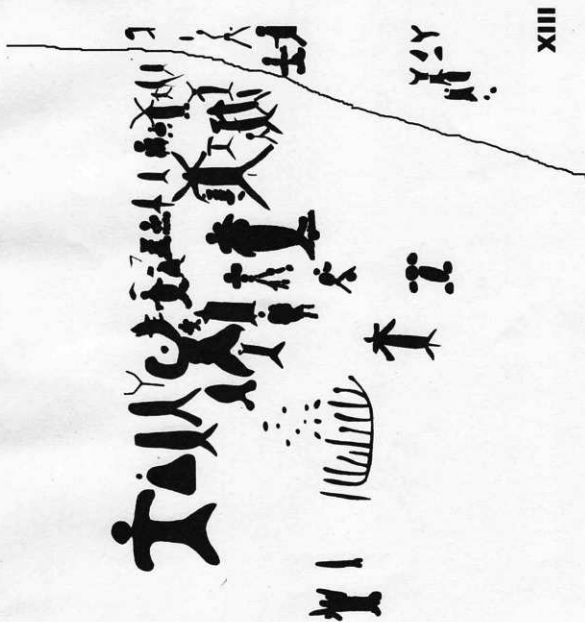
scale
0
10
20
30
40
50cm

XIII



XIV

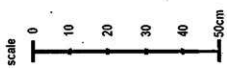
XIV



XV

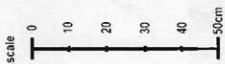
1

XVI

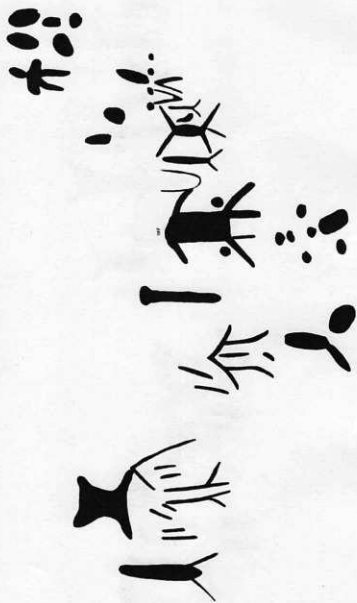




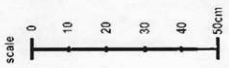
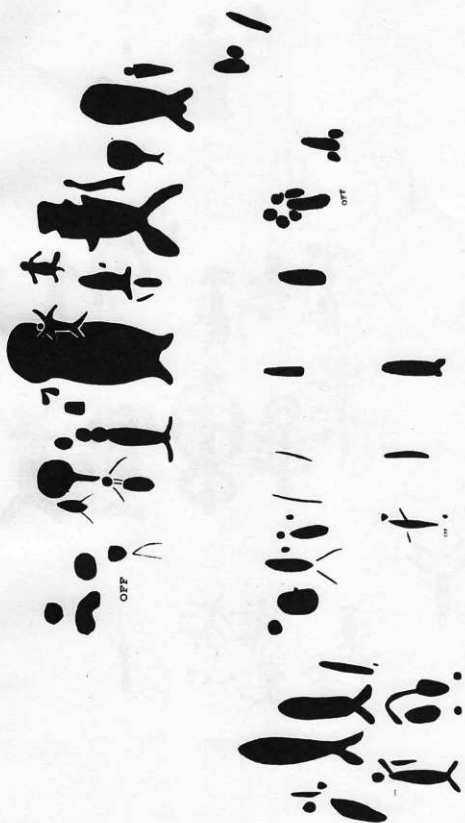
XVIII

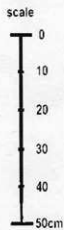
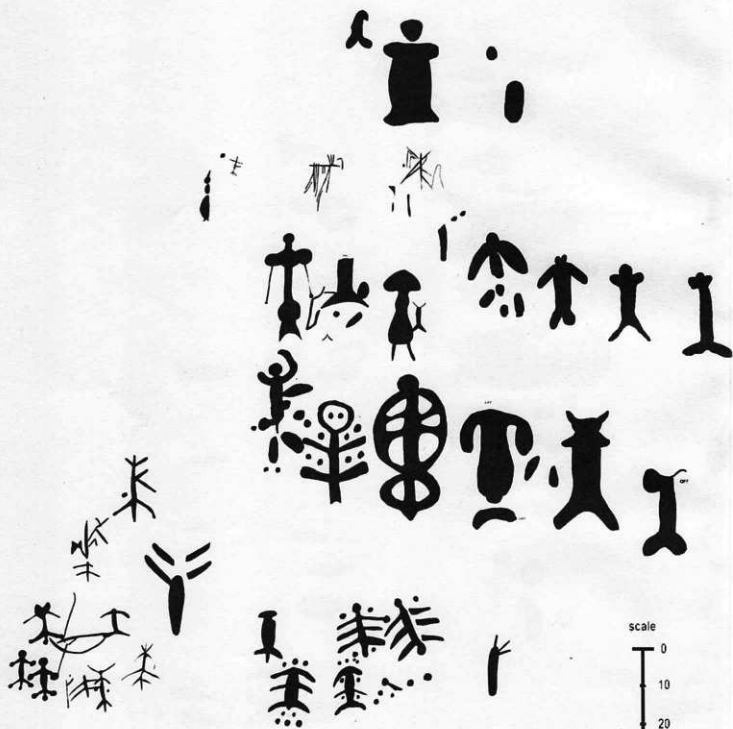


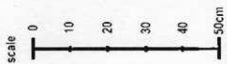
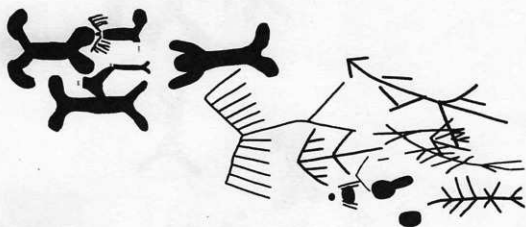
XIX



XX

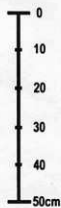








scale



XXIV



カタログ

(凡例)

セクション名

作品番号指定図

作品横きおこし

作品横きおこし

作品横きおこし

固有番号, サイズ (高さ), 技法別 (下記参照)
(通し番号) (サイズ (幅)) 特記事項

(*A*Abrasion 削磨法, *D*Drilling 穿孔法, *I*Incision 鏤線法, *P*Pecking 敲打法, *U*Undecided 決定できず)

作品写真

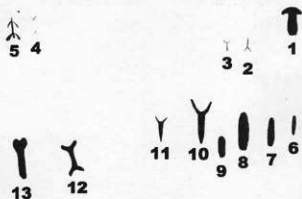
石膏型写真

写真番号 (該当作品番号)

石膏型番号 (該当作品番号)

注記:

Section I



I-1, 15cmh, P
(1)



I-2, 8cmh, I
(2)



I-3, 6cmh, U
(3)



I-4, 12cmh, A
(4)



I-5, 14cmh, A
(5)



I-6, 11cmh, P
(6)



I-7, 16cmh, P
(7)



I-8, 21cmh, P
(8)



I-9, 12cmh, P
(9)



I-10, 25cmh, A
(10)



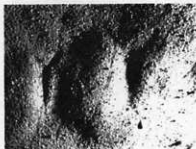
I-11, 15cmh, A
(11)



I-12, 21cmh, P
(12)



I-13, 23cmh, P
(13)

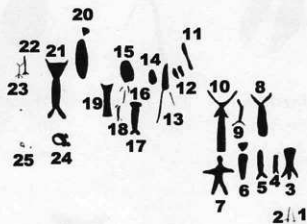


Ph. 1 (I/10-11)

Note:

このセクションは、1970年に刊行された『フゴッベ洞窟』（フゴッベ洞窟調査団編・ニューサイエンス社、以下「報告書」と記す）の第3図「1951-1953年度 全遺跡平面図」（以下「平面図」と記す）の「C4号」区にはほぼ相当する岩面の、現在の地面から2m程度の高さの部分である。その上の部分は、風化が激しいためか、作品存在を認めることができない。このセクションも実際には風化がかなり進んでおり、おそらく、他のセクションに比べて、洞内地積物による埋没がかなり後になったからだろうと思われる。「実測図」には6点の作品が記録されているが、今回13点を確認した。ただし、I-10とI-11を除くと、他の作品はかなり見極めがたく、作者が意図したであろうかたちを相当程度まで過剰解釈気味に描き起こしている。13点すべてが人物像であろうと思われる。中でも、I-10とI-11は「有角」人物像がアブレイジョンにより制作されていて、シャープな造形の痕跡が見いだせる。I-12は「X字形」人物像といえるかもしれない。

Section II



II-1, 7cmh, *U*
(14)



II-2, 9cmh, *U*
(15)



II-3, 18cmh, *P*
(16)



II-4, 10cmh, *P*
(17)



II-5, 16cmh, *P*
(18)



II-6, 20cmh, *P*
(19)



II-7, 22cmh, *P*
(20)



II-8, 24cmh, *U*
(21)



II-9, 15cmh, *U*
(22)



II-10, 33cmh, *U*
(23)



II-11, 15cmh, *P*
(24)



II-12, 7cmh, *P*
(25)



II-13, 33cmh, *U*
(26)



II-14, 8cmh, *P*
(27)



II-15, 13cmh, *P*
(28)



II-16, 9cmh, *U*
(29)



II-17, 18cmh, *P*
(30)



II-18, 9cmh, *U*
(31)



II-19, 18cmh, *P*
(32)



II-20, 28cmh, *U*
(33)



II-21, 34cmh, *P*
(34)



II-22, 11cmh, *U*
(35)



II-23, 9cmh, *U*
(36)



II-24, 8cmh, *P*
(37)



II-25, 5cmh, *P*
(38)



Ph.2-a(II/8-9)



Ph.2-b(II/11-19)



Ph.2-c(II/21-23)

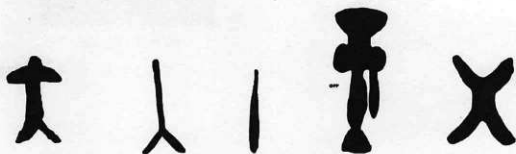
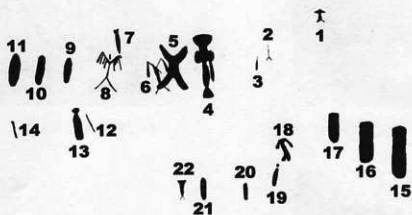


Ph.2-d(II/24-25)

Note:

このセクションは、「平面図」の「C5号」区から「C6号」区にかけての岩面の地面から2mよりの上の部分である。「実測図」では25点程度が記録されているが、今回も計25作品を認めるに至った。ただし、このセクションも風化はかなり進んでいて、描きおこし作業も容易ではなかったといえる。II-1からII-23まですべて人物像、およびその断片と考えられる。「有角」もいくつか見いだされる。II-24とII-25が何を表しているのか判断できないが、技法的にはベッキングによる痕跡を土谷昭重氏が指摘している。(談話による)

Section III



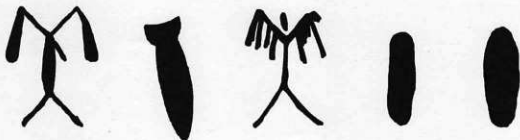
III-1, 8cmh, *U*
(39)

III-2, 9cmh, *U*
(40)

III-3, 8cmh, *U*
(41)

III-4, 34cmh, *P&A*
(42)

III-5, 25cmh, *U*
(43)



III-6, 20cmh, *I*
(44)

III-7, 14cmh, *P*
(45)

III-8, 23cmh, *I*
(46)

III-9, 14cmh, *P*
(47)

III-10, 16cmh, *P*
(48)



III-11, 18cmh, P
(49)



III-12, 10cmh, U
(50)



III-13, 18cmh, P
(51)



III-14, 10cmh, U
(52)



III-15, 28cmh, P
(53)



III-16, 22cmh, P
(54)



III-17, 16cmh, P
(55)



III-18, 13cmh, P
(56)



III-19, 12cmh, P
(57)



III-20, 10cmh, P
(58)



III-21, 12cmh, P
(59)



III-22, 12cmh, P
(60)



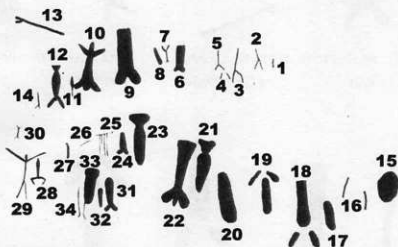
Ph.3 (III/ 5-8)

Note:

このセクションはセクション II の下の部分に当たり、やはり風化は進行している。「実測図」では7点程度しか記録されていないが、この図面では22作品を描き起こしており、すべてが人物像、およびその断

片と考えられる。III-4は、洞内の対面ともいえる場所にある XXI-24 とサイズのにも技法的にも、さらにかたちの上でも類似性があると、浅野敏昭氏が指摘していて興味深い。(談話による) III-5 と III-6、また III-7 と III-8 は、それぞれ部分的に重なっているが、「実測図」ではインサイジョンによる III-6 と III-8 を記載しておらず、作成者はこの 2 作品を偽刻と判断したのだろうと推測される。このセクションの、この 2 点以外の作品が、右側、即ち洞外を光源として制作されたのに対し、この 2 点は左側を光源としているようで、特異というべきではあるだろう。この図面では、描き起こしているが、それはこれら 2 点が後代の偽刻であるにせよ、洞内の他の作品群とかたちを作り上げてゆくシステムが類似しており、これら 2 点の制作者は、フゴッペ洞窟・岩面刻面というものの本質を十分に理解しているといえるからである。重ねがきを分析すると、インサイジョンによる 2 点が後のようであり、それがどれほど隔たった時期なのかはわからないが、例えばセクション XXIII に散見されるインサイジョンによる作品群と同時期と考えることも可能であり、フゴッペ洞窟においては、ベッキングやアブレイジョンによる作品群よりは、新しい時期にインサイジョンが用いられたことを、これらの重ねがきからいえるとも考えられる。すなわち、筆者はこれら 2 点を真作と見なしているが、もちろん今後の議論の待たれる事例であることも認めなければならない。その際、フゴッペにおいて、重ねがきが他にセクション XX くらいにしか見いだせないことも考慮する必要があるだろう。

Section IV



OFF



IV-1, 5cmh, /
(61)



IV-2, 13cmh, /
(62)



IV-3, 19cmh, /
(63)



IV-4, 4cmh, /
(64)



IV-5, 11cmh, /
(65)

OFF



IV-6, 15cmh, P
(66)



IV-7, 10cmh, U
(67)



IV-8, 9cmh, P
(68)



IV-9, 30cmh, P
(69)



IV-10, 27cmh, U
(70)



IV-11, 12cmh, *U*
(71)

IV-12, 24cmh, *U*
(72)

IV-13, 10cmh, *A*
(73) (27cmw)

IV-14, 10cmh, *I*
(74)

IV-15, 17cmh, *P*
(75)



IV-16, 18cmh, *U*
(76)

IV-17, 10cmh, *P*
(77)

IV-18, 38cmh, *P*
(78)

IV-19, 24cmh, *P*
(79)

IV-20, 29cmh, *P*
(80)



IV-21, 30cmh, *P*
(81)

IV-22, 37cmh, *P*
(82)

IV-23, 28cmh, *P*
(83)

IV-24, 13cmh, *P*
(84)

IV-25, 13cmh, *I*
(85)



IV-26, 4cmh, *I*
(86)

IV-27, 9cmh, *I*
(87)

IV-28, 15cmh, *U*
(88)

IV-29, 29cmh, *I*
(89)

IV-30, 9cmh, *U*
(90)



IV-31, 19cmh, P
(91)



IV-32, 10cmh, P
(92)



IV-33, 20cmh, P
(93)



IV-34, 19cmh, I
(94)



Ph.4-a(IV/10-13)



Ph.4-b(IV/21-22)

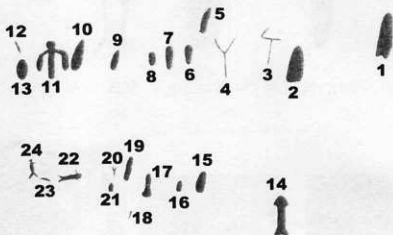


Ph.4-c(IV/23-27, 31-34)

Note:

このセクションは、「平面図」の「C6号」区から「C7号」区にかけての岩面の地面から2m以上の部分であり、セクションIIIまでに比べると風化の進行は緩やかではあるが、それでも見極めがたい作品が多くあり、描きおこし作業では過剰解釈気味にならざるを得なかった。「実測図」でも今回の図面と同様約30点の作品を記録しているようであるが、今回描き起こしたかたちとは相当異なっている。ほとんどすべてが人物像であると筆者は考えているが、インサイジョンによる作品もいくつかあり、それらの解釈に関しては、今後検討されるべきだろう。IV-13は他の作品群のある岩面からほぼ直角的に後退した部分にあり、人為とは認められるが、何を表そうとしたのかはわからない。発掘時に何らかの作業が痕跡として残った可能性も捨てきれないが、描き起こして図面には加えた。(Ph.4-a 左上部分を参照)

Section V



V-1, 25cmh, *P*
(95)



V-2, 21cmh, *P*
(96)



V-3, 21cmh, *I*
(97)



V-4, 23cmh, *I*
(98)



V-5, 16cmh, *P*
(99)



V-6, 11cmh, *P*
(100)



V-7, 13cmh, *P*
(101)



V-8, 8cmh, *P*
(102)



V-9, 12cmh, *P*
(103)



V-10, 18cmh, *P*
(104)



V-11, 21cmh, P
(105)



V-12, 7cmh, P
(106)



V-13, 12cmh, P
(107)



V-14, 23cmh, P
(108)



V-15, 12cmh, P
(109)



V-16, 7cmh, P
(110)



V-17, 13cmh, P
(111)



V-18, 6cmh, U
(112)



V-19, 13cmh, P
(113)



V-20, 6cmh, U
(114)



V-21, 5cmh, P
(115) (15cmw)



V-22, 10cmh, A
(116) (7cmw)



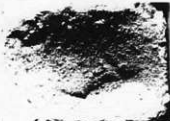
V-23, 2cmh, A
(117)



V-24, 12cmh, U
(118)



Ph.5(V/22-24)

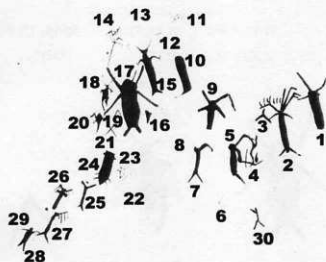


S48b(V/22)

Note:

このセクションは、セクションIVの下の部分であり、ややオーバーハングした岩面直下の地面には、発掘時に発見された伊跡が現在までそのまま保存されている。この伊が作品制作後かなり長期にわたって使用されたのだろうか、このセクションの岩面はかなり黒ずんでいて、また風化も進行しているため、作品を見極めることはかなり難しい。「実測図」では、わずかに7点程度が認められるのだが、この「図面」では、24点の作品を描き起こした。ほとんどが人物像、およびその断片と考えられるが、縦長の楕円形としてのみ示したのも多くある。なお、V-22からV-24の3作品は、従来セクションIXの右部分の「船」の表現などと関連づけられて漁獵図と解釈されることもあったが、今回の図面では岩面の屈曲している線をセクションの境界とし、このセクションに組み込むことにした。これら3点のうち、横位置で制作されているV-22は『謎の刻面 フゴッペ洞窟』（峰山巖・掛川彌一郎・著、六興出版、1983年刊）などにおいて「海獣」と解釈されているが、屈曲線を境に別の空間に表現されていることから、必ずしもIX-2の「船」と併せて考慮する必要はなく、人物像が何らかの理由で横位置に制作されたといえるのではないかと、筆者は考えている。もちろん「海獣」説が依然として有力であることは間違いない、ここでは横位置人物像の可能性を提起するにとどめておきたい。

Section VI



VI-1, 32cmh, A
(119)



VI-2, 38cmh, A
(120)



VI-3, 9cmh, A
(121)



VI-4, 19cmh, U
(122)



VI-5, 27cmh, A
(123)



VI-6, 8cmh, I
(124)



VI-7, 23cmh, A
(125)



VI-8, 14cmh, I
(126)



VI-9, 22cmh, A
(127)



VI-10, 23cmh, U
(128)



VI-11, 11cmh, /
(129)



VI-12, 8cmh, /
(130)



VI-13, 7cmh, /
(131)



VI-14, 23cmh, /
(132)



VI-15, 32cmh, A
(133)



VI-16, 8cmh, U
(134)



VI-17, 40cmh, A
(135)



VI-18, 29cmh, A
(136)



VI-19, 6cmh, A
(137)



VI-20, 12cmh, A
(138)



VI-21, 9cmh, U
(139)



VI-22, 14cmh, /
(140)



VI-23, 10cmh, /
(141)



VI-24, 20cmh, A
(142)



VI-25, 19cmh, A
(143)



VI-26, 18cmh, A
(144)



VI-27, 19cmh, A
(145)



VI-28, 7cmh, U
(146)



VI-29, 14cmh, A
(147)



VI-30, 8cmh, U
(148)



Ph.6-a (VI/1-2)



Ph.6-b (VI/3-9)



Ph.6-c (VI/10-15)



Ph.6-d (VI/16-21)



Ph.6-e (VI/22-29)



S84 (VI/1-2)



S53 (VI/2-3)



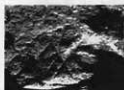
S3 (VI/4-5)



S41 (VI/7)



S5 (VI/9)



S25c (VI/11)



S47 (VI/15, 17-18)



S57 (VI/16-20)



S12 (VI/22-25)



S2a (VI/25)



S30(VI/27-29)

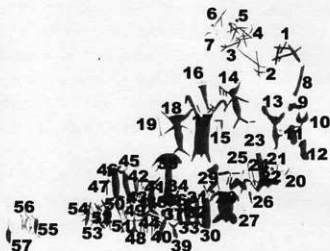


S25b (VI/30)

Note:

このセクションは、「平面図」の「C7号」区から「C8号」区にかけての岩面の、地面から4m~6mまでの部分を占める。これまでのセクションと比べると、風化はそれほど進んでおらず、画像もある程度までは確認できる。「実測図」では約25の画像を認めているが、今回の「図面」では29の作品を数えるに至った。洞内では奥部に近いところであり、アブレイジョンによる作品がほとんどであることも特徴的である。VI-2の左にいくつかの小さく浅い穴が見いだせるが、今回は人為と見なさなかった。最上方にはVI-11からV-14までインサイジョンによる錯綜する線があるが、これらが何を表しているかはわからない。VI-17は40cmの高さがあり、堂々とした威風を保っていて印象的な作品である。輪郭線がアブレイジョンで刻まれ、内部はそれほど削られていないが、作者の意図したかたちは全体であったろうと判断した。この作品は、「有角」であり、かつ向かって左のVI-18を右手に持つ太鼓状のものと見立てて、シャーマンと解釈されることもあったが、今回の「図面」ではVI-18も独立した人物像であるとした。フゴッペ洞窟全体において、人物像が何かを手に持っている作品はないと、筆者は考えている。一部の「持ち物」などに注意を集中しすぎることなく、フゴッペ洞窟・岩面刻画を総体として捉えるべきだという考え方によっている。他の作品もほとんどが人物像だと思われるが、それぞれ個性的な細部を有し、興味深いセクションとなっている。VI-2をはじめとして「有角」も多く、さらに「角」が折れ曲がり、「角」から派生的な多くの垂直線が続いているものも多い。これら「角」の細部が何を表そうとしたのかは、今後の検討課題であろう。

Section VII



VII-1, 14cmh, /
(149)



VII-2, 17cmh, /
(150)



VII-3, 9cmh, /
(151) (11cmw)



VII-4, 13cmh, /
(152)



VII-5, 12cmh, /
(153)



VII-6, 11cmh, /
(154)



VII-7, 5cmh, /
(155)



VII-8, 18cmh, A
(156)



VII-9, 5cmh, U
(157)



VII-10, 10cmh, U
(158)



VII-11, 11cmh, A
(159)



VII-12, 12cmh, A
(160)



VII-13, 24cmh, A
(161)



VII-14, 26cmh, A
(162) With red
ochre



VII-15, 7cmh, A
(163)



VII-16, 15cmh, A
(164)



VII-17, 38cmh, A
(165)



VII-18, 28cmh, A
(166)



VII-19, 13cmh, /
(167)



VII-20, 6cmh, /
(168)



VII-21, 10cmh, /
(169)



VII-22, 3cmh, U
(170)



VII-23, 22cmh, A
(171)



VII-24, 10cmh, A
(172)



VII-25, 18cmh, A
(173)



VII-26, 7cmh, U
(174)



VII-27, 6cmh, U
(175)



VII-28, 33cmh, A
(176)



VII-29, 7cmh, U
(177)



VII-30, 17cmh, A
(178)



VII-31, 23cmh, A
(179)



VII-32, 8cmh, U
(180)



VII-33, 23cmh, A
(181)



VII-34, 7cmh, A
(182)



VII-35, 34cmh, A
(183) With red
ochre



VII-36, 13cmh, A
(184)



VII-37, 8cmh, A
(185)



VII-38, 5cmh, A
(186)



VII-39, 10cmh, A
(187)



VII-40, 12cmh, A
(188)



VII-41, 24cm, A
(189) With red
ochre



VII-42, 20cmh, A
(190) With red
ochre



VII-43, 9cmh, A
(191)



VII-44, 14cmh, A
(192)



VII-45, 24cmh, A
(193)



VII-46, 21cmh, A
(194)



VII-47, 9cmh, A
(195)



VII-48, 16cmh, A
(196)



VII-49, 10cmh, A
(197)



VII-50, 13cmh, A
(198)



VII-51, 8cmh, A
(199)



VII-52, 19cmh, A
(200)



VII-53, 16cmh, A
(201)



VII-54, 15cmh, A
(202)



VII-55, 14cmh, A
(203)



VII-56, 13cmh, A
(204)



VII-57, 23cmh, A
(205)



Ph. 7-a (VII/1-7)



Ph. 7-b (VII/8-14)



Ph. 7-c (VII/15-19)



Ph. 7-d (VII/20-33)



Ph. 7-e (VII/33-39)



Ph. 7-f (VII/39-54)



Ph. 7-g (VII/55-57)



S94 (VII/14-17)



S39 (VII/18-19)



S27a (VII/20-26)



S11 (IIV/27-29)



S44 (VII/30-39)



S54 (VII/34-44)



S40 (VII/45-54)



S27b (VII/55-57)

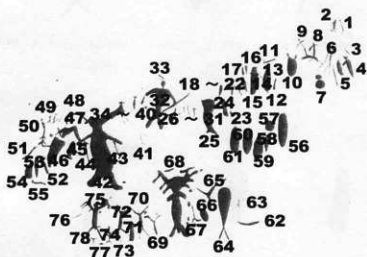
Note:

このセクションは、セクションVIの岩面がほぼ直角に屈曲した、さらに奥の方の岩面の部分であり、洞内の地面からは正対できないため作品の姿がほとんど見えない場所にある。このセクションを現在観察するためにはセクションXIIの上のテラスに立たなければならないが、それでも1m以上離れてしか見ることができない。岩面全体が洞奥部に向いているので、風化の度合いは少なく、ほとんどがアブレイジョンによる作品も制作当初のあり方をよく示しているようである。ただし、アブレイジョンによる作品でも削磨部分の深さには差があるものがあり、浅い部分をどのように捉えるかで「実測図」と今回の「図面」は違いが顕わになっている。

特筆すべきは、赤色顔料（非破壊検査により「ベンガラ」と判明している）が部分的に残存している作

品がいくつかあることであり、VII-14では肉眼でも確認可能だが、他にVII-41などにもわずかに見いだされる。他のセクションの作品では、X-4にも顔料が付着しており、これら3作品を中心とした特定の同じようなかたちの作品にだけベンガラが充填されていた可能性もあるが、もっと多くの作品にも普通にベンガラが塗布されていたという考え方も捨てきれない。ベンガラは北海道開拓記念館所蔵の貝にも付着しているものがあり、今後それらとの同定分析も重要である。いずれにせよ、頸部が逆三角形の「有角」であるVII-14などの人物像は、フゴッペ洞窟・岩面刻画においてひとつの典型ともいえるかたちであり、それにベンガラが見いだされるのは意義深いことといえる。上方のVII-1からVII-7まではセクションVIの上方にもあるインサイジョンによる線の作品群の連続であり、やはりその意味するところはわからない。VII-8以下のすべては人物像、およびその断片と考えられ、特に下方には帯状にきわめて集密的に作品が表現されており、どれだけの部分表現を一作品に限定すべきか、最終的に判断しがたい場合もあった。例えば、VII-41の真下にVII-44のかたちがあるが、同様の部分が、北海道開拓記念館所蔵の「刻画のある石片」(R1)にもあり、ふたつの部分がまとまって一個の作品となっているとも考えられるが、今回は暫定的に別作品と判断した。なお、最も左側のVII-55からVII-57までの3作品は、別の岩面空間に制作されているが、便宜的にこのセクションに含めた。

Section VIII



VIII-1, 12cmh, *U*
(206)



VIII-2, 8cmh, *U*
(207)



VIII-3, 13cmh, *U*
(208)



VIII-4, 16cmh, *U*
(209)



VIII-5, 9cmh, *U*
(210)



VIII-6, 25cmh, *U*
(211)



VIII-7, 8cmh, *U*
(212)



VIII-8, 11cmh, *U*
(213)



VIII-9, 13cmh, *U*
(214)



VIII-10, 19cmh, *U*
(215)



VIII-11, 5cmh, U
(216) (8cmw)



VIII-12, 8cmh, U
(217)



VIII-13, 15cmh, A
(218)



VIII-14, 8cmh, A
(219)



VIII-15, 23cmh, A
(220)



VIII-16, 6cmh, U
(221)



VIII-17, 5cmh, U
(222)



VIII-18, 9cmh, U
(223)



VIII-19, 5cmh, U
(224)



VIII-20, 10cmh, U
(225)



VIII-21, 8cmh, U
(226)



VIII-22, 7cmh, U
(227)



VIII-23, 4cmh, U
(228)



VIII-24, 10cmh, U
(229)



VIII-25, 26cmh, P
(230)



VIII-26, 8cmh, U
(231)



VIII-27, 8cmh, U
(232)



VIII-28, 6cmh, U
(233)



VIII-29, 8cmh, U
(234)



VIII-30, 15cmh, A
(235)



VIII-31, 13cmh, A
(236) (18cmw)

VIII-32, 27cmh, P
(237)

VIII-33, 6cmh, U
(238)

VIII-34, 2cmh, U
(239)

VIII-35, 6cmh, U
(240)



VIII-36, 10cmh, U
(241)

VIII-37, 13cmh, A
(242)

VIII-38, 5cmh, U
(243)

VIII-39, 5cmh, U
(244)

VIII-40, 4cmh, U
(245)



VIII-41, 9cmh, U
(246)

VIII-42, 45cmh, P
(247)

VIII-43, 10cmh, P
(248)

VIII-44, 13cmh, P
(249)

VIII-45, 10cmh, U
(250)



VIII-46, 23cmh, P
(251)

VIII-47, 5cmh, P
(252)

VIII-48, 9cmh, P
(253)

VIII-49, 12cmh, U
(254)

VIII-50, 16cmh, U
(255)



VIII-51, 12cmh, U
(256) (8cmw)



VIII-52, 10cmh, U
(257)



VIII-53, 11cmh, U
(258)



VIII-54, 11cmh, U
(259)



VIII-55, 3cmh, U
(260)



VIII-56, 19cmh, U
(261)



VIII-57, 6cmh, U
(262)



VIII-58, 10cmh, U
(263)



VIII-59, 8cmh, U
(264)



VIII-60, 14cmh, U
(265)



VIII-61, 15cmh, U
(266)



VIII-62, 2cmh, U
(267) (13cmw)



VIII-63, 8cmh, U
(268)



VIII-64, 29cmh, P
(269)



VIII-65, 13cmh, U
(270)



VIII-66, 8cmh, U
(271)



VIII-67, 15cmh, U
(272)



VIII-68, 39cmh, P
(273)



VIII-69, 15cmh, A
(274)



VIII-70, 20cmh, A
(275)



VIII-71, 11cmh, U
(276)

VIII-72, 18cmh, A
(277)

VIII-73, 8cmh, U
(278)

VIII-74, 10cmh, U
(279)

VIII-75, 24cmh, A
(280)



VIII-76, 2cmh, U
(281) (7cmw)

VIII-77, 4cmh, U
(282)

VIII-78, 4cmh, U
(283)



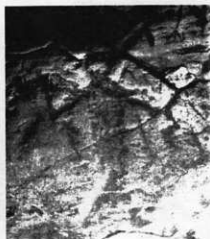
Ph. 8-a (VIII/1-13)



Ph. 8-b (VIII/8-23)



Ph. 8-c (VIII/20-37)



Ph. 8-d (VIII/36-44)



Ph. 8-e (VIII/44-54)



Ph. 8-f (VIII/56-61)



Ph. 8-g (VIII/62-72)



Ph. 8-h (VIII/70-78)



S87 (VIII/1-9)



S2b (VIII/9-10)



S6 (VIII/13-20)



S4 (VIII/59-61)



S21 (VIII/23-28)



S23 (VIII/29-35)



S69 (VIII/39-44)



S31 (VIII/42)



S88 (VIII/50-55)



S89 (VIII/65-68)



S60 (VIII/68-70)



S43 (VIII/72-78)

Note:

このセクションは、セクション VI の左下に広がる、地面からの高さ約 2m~4m の部分を占めている。右上の半分ほどは、岩面が少々上向きであり、そのためか堆積物が固着している部分は、VIII-1 から VIII-9 までなど、かたちが少々見極めがたい部分がある。なお、セクション VI との境界にある人物像は、岩面の連続性から、セクション VI に含めて、VI-30 とした。このセクションには、堆積物の固着のため技法の判別が難しい作品も多いが、ベッキングによる大きな作品があることを特に指摘しておきたい。VIII-32 は、フゴッペ洞窟・岩面刻画の中でも、現実の人体にまだ比例的に近いかたちをしており、掛川源一郎氏はこれがかつて「ジジマル（Jリーグ発足当時のブラジル人名ゴールキーパーの名前）」と呼んだことがある。（私信による）この作品はこれまで VIII-33 を頭飾りと見立てて、一作品と考えられてきたようであるが、今回は彫りの深さの違いから、別作品と判断した。ただし、一作品内で彫りの深さに差があることも否定できず、今後の検証が必要であろう。VIII-42 は高さ 45cm で、フゴッペ洞窟・岩面刻画の中でも最大級の作品であり、石膏型も S69 と S81 のふたつに分けて作成されているのが興味深い。VIII-68 もベッキングによる大きな作品であり、複雑に入り組んだ角を有しているようで、印象的な作品である。このような角の部分は、アブレイジョンによる角の部分とはかなり印象が異なるが、表現システムは同様とも考えられ、ふたつの技法による効果の違いが見てとれるようである。

Section IX



IX-1, 10cmh, U
(284)



IX-2, 9cmh, A
(285)(13cmw)



IX-3, 11cmh, A
(286)



IX-4, 8cmh, I
(287)(10cmw)



IX-5, 8cmh, I
(288)



IX-6, 6cmh, A
(289)(10cmw)



IX-7, 4cmh, U
(290)



IX-8, 10cmh, A
(291)



IX-9, 10cmh, A
(292)(13cmw)



IX-10, 13cmh, P
(293)



IX-11, 15cmh, P
(294)



IX-12, 16cmh, P
(295)



IX-13, 13cmh, A
(296)



IX-14, 11cmh, A
(297)



IX-15, 13cmh, A
(298)



IX-16, 14cmh, A
(299)



IX-17, 7cmh, U
(300)



IX-18, 12cmh, A
(301)



IX-19, 14cmh, A
(302)



IX-20, 15cmh, A
(303)



IX-21, 10cmh, A
(304)



IX-22, 10cmh, A
(305)



IX-23, 8cmh, A
(306)



IX-24, 18cmh, A
(307)



IX-25, 13cmh, A
(308)



IX-26, 20cmh, A
(309)



IX-27, 13cmh, A
(310)



IX-28, 12cmh, A
(311)



IX-29, 4cmh, U
(312)



IX-30, 13cmh, A
(313)



IX-31, 6cmh, A
(314)



IX-32, 18cmh, A
(315)



IX-33, 13cmh, A
(316)



IX-34, 10cmh, A
(317)



IX-35, 5cmh, A
(318)



IX-36, 8cmh, A
(319)



Ph. 9-a (IX/2)



Ph. 9-b (IX/10-14)



Ph. 9-c (IX/3-9)



Ph. 9-d (IX/ 15-17)



Ph. 9-e (IX/17-21)



Ph. 9-f (IX/17-26)



Ph. 9-g (IX/31-36)



S22 (IX/10-14)



S25a (IX/3)



S42 (IX/4-9)



S48a (IX/8-9)



S35 (IX/14)



S51 (IX/15-16)



S66 (IX/17-22)



S1 (IX/23-27)



S26 (IX/31-33)

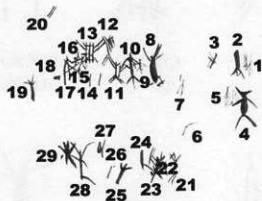


S52 (IX/29-33)

Note:

このセクションは、セクション VIII の下に位置し、地面からは2m の高さまでの岩面である。「実測図」では、セクション VIII と接する部分に 10 程度のかたちが記録されているが、今回は風化が進んだためだろうか、5 作品しか確認できなかった。IX-2 は従来 V-22 「海獣」と関連づけられて、「船」と一般に解釈されているが、フゴッペ洞窟においても、またシベリアなど付近の岩面画遺跡においても類例が見いだせない以上、きわめて孤立した作例というべきだろう。IX-6 と IX-9 は「四足獣」と解釈され、IX-4 の「翼」や X-3 の人物像などと併せて、狩猟の情景を表していると考えられるが、それが妥当かどうか、類例が確認されていない現状では、判断する材料がないというしかないだろう。ただ、「四足獣」はフゴッペにも他にはなく、きわめてオリジナルな作品とは評価できるだろう。上の「情景」の下には、アブレイジョンによる人物像が集中的にあり、それぞれ個性的な表現が多いといえるだろう。中でも、X-32 と X-33 は、風化のせいかなり薄れてはいるが、「有翼」ともいえる表現になっており、フゴッペを代表する XII-21 の「有翼」人物像と並んで、数少ないが、特色ある作品であるといえよう。

Section X



X-1, 15cmh, /
(320)



X-2, 19cmh, A
(321)



X-3, 11cmh, A
(322)



X-4, 27cmh, A
(323) with red
ochre



X-5, 13cmh, /
(324)



X-6, 12cmh, A
(325)



X-7, 13cmh, /
(326)



X-8, 24cmh, A
(327)



X-9, 9cmh, A
(328)



X-10, 20cmh, A
(329)



X-11, 13cmh, A
(330)



X-12, 19cmh, A
(331)



X-13, 14cmh, A
(332)



X-14, 8cmh, A
(333)



X-15, 13cmh, A
(334)



X-16, 8cmh, A
(335)



X-17, 16cmh, A
(336)



X-18, 3cmh, U
(337)



X-19, 15cmh, A
(338)



X-20, 7cmh, A
(339)



X-21, 18cmh, A
(340)



X-22, 8cmh, A
(341)



X-23, 20cmh, A
(342)



X-24, 13cmh, A
(343)



X-25, 13cmh, A
(344)



X-26, 7cmh, A
(345)



X-27, 11cmh, A
(346)



X-28, 24cmh, A
(347)



X-29, 16cmh, A
(348)



Ph. 10-a (X/1-3)



Ph. 10-b (X/4-5)



Ph. 10-c (X/6-7)



Ph. 10-d (X/ 8-18)



Ph. 10-e (X/19)



Ph. 10-f (X/20)



Ph. 10-g (X/21-29)



S.45b (X/1-2)



S.79 (X/4-5)



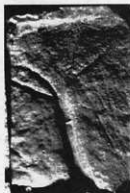
S8a (X/6)



S45a (X/8)



S85 (X/9-12)



S8b (X/19)



S8c (X/23-24)



S61b (X/28-29)



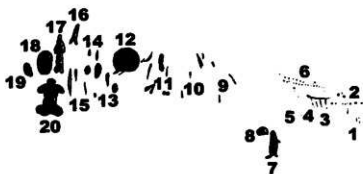
S50a(X/disappeared)

Note:

このセクションは、「平面図」の「C8号」区から「D1号区」、すなわち最奥部にあり、地面から1.5mほどの高さにあるテラス状の場所に続く岩面に作品が制作されている。このセクションも、セクションVIIと同様に地面からは全体が見えず、テラスの上ではじめて全容が確認できる。この洞奥部にあるテラスは洞内でも特別な場所という印象を与え、そこにある作品群も、すべてアブレイジョンで制作されているが、シャープなかたちが印象深く、フゴッペの造形感覚を代表するものと評価できよう。ただし、この部分は近年になって何らかの力が加えられたのか、X-21からX-29までの作品が「実測図」に記録されている場所ではなく、これら9作品の制作されている岩塊がそのまま滑り落ちて、さらに現在の安定した場所に移動されたものと推測される。それがいつのことかはわからないが、その当時の管理者の心遣いが窺えて興味深い。もうひとつ、このセクションの作品群からはかなり左方向に離れているが、便宜的にこのセクションに含めた石膏型 S50a に残されているかたちは、現在洞内では発見できず、いつかの時点で物理的に破壊されたか、洞外へ移動させられたか、と推測せざるをえない。洞内での何らかの作業中に、この作品のあった岩塊が大いに損傷を受けてしまったのだろう。

さて、X-4 はフゴッペ洞窟・岩面刻画の中でも最も保存の良い作品であり、フゴッペ芸術の到達点が如実に表されていると、筆者は評価している。鋭く削り取られ、深く磨かれたこの作品には、フゴッペの柔らかい岩質にふさわしいアブレイジョンという技法の利点が生かされているようで、最奥部で輝くような力を放っている。この頭部が逆三角形の人物像は、ベンガラの残存している VII-14 と同じ形態を有しており、この作品にもわずかではあるがベンガラが認められるのである。フゴッペ洞窟の結節点ともいえる特別な場所にあるこの作品は、やはり重要な意味を担っていると判断してよいだろう。他にもアブレイジョンによる印象的な作品が多くあるが、特に土谷昭重氏が「火炎人物像」と呼び慣わしていた X-23 は、ダイナミックな線の集合がうまく生かされた作品であるといえよう。(談話による) X-19 は「実測図」では脚部の表現まで備わっているが、現状は上半身だけが残っており、これも下半身部分は何らかの理由で破壊されたと考えられないだろう。

Section XI



XI-1, 8cmh, I
(349)



XI-2, 10cmh, D
(350)(18cmw)



XI-3, 10cmh, A
(351)(15cmw)



XI-4, 13cmh, I
(352)



XI-5, 17cmh, A
(353)



XI-6, 14cmh, D
(354)(38cmw)



XI-7, 16cmh, P
(355)



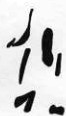
XI-8, 5cmh, P
(356)



XI-9, 16cmh, U
(357)



XI-10, 25cmh, U
(358)



XI-11, 30cmh, U
(359)



XI-12, 16cmh, A
(360)



XI-13, 18cmh, U
(361)



XI-14, 8cmh, U
(362)



XI-15, 17cmh, U
(363)



XI-16, 12cmh, U
(364)



XI-17, 22cmh, A
(365)



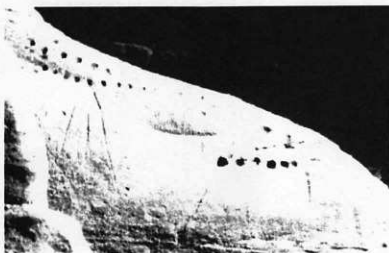
XI-18, 14cmh, U
(366)



XI-19, 8cmh, U
(367)



XI-20, 22cmh, P
(368)



Ph. 11-a (XI/1-6)



Ph. 11-b (VIII/11-15)



S10 (XI/1-4. 6)



S73 (XI/2-6)



S29a (XI/5-6)

Note:

このセクションは、「平面図」の「D1号」区から「D2号」区にかけての、地面から高さ2m~3mの範囲にある場所である。このセクションは、全く空間的に異なるふたつの場所を便宜的にひとつにしたものである。XI-1 から XI-8 までは、前の岩の陰になった場所にあるせいか、列状の多数の穴を中心に比較的保存がよいが、照明設備の不具合により、緑色バクテリアが表面に繁茂していた時期もあり、その影響は現在でも懸念される。一方、XI-9 から XI-20 までははり出した大きな岩の表面に制作されていて、風化が進んでいるばかりか、上方からの水滴なども直接あたり、岩面の状態はよいとはいえない。「実測図」でも明確なかたちは記録されていないが、今回の「図面」でも過剰解釈気味の部分があることは認めなければならない。

XI-2 と XI-6 は連続した列状の穴とも考えられるが、ここでは便宜的にふたつに分けた。「歪状穴」との説もあるが、小さい穴が多く、断面が歪状であるかどうかは確認できない。いずれにせよ、フゴッペにおいてはきわめて特異な表現であり、これら数十の穴の連続をどう捉えるかが、フゴッペ洞窟・岩面刻面全体に対する考え方にも影響を与えるだろう。穴の周囲にはインサイジョンによる練的な作品も多いが、そのうち、アブレイジョンによる XI-8 はきわめて図式化された「四足獣」とも考えられ、興味深い作品である。

Section XII



XII-1, 5cmh, /
(369)(9cmw)



XII-2, 12cmh, A
(370)



XII-3, 7cmh, A
(371)



XII-4, 22cmh, A
(372)



XII-5, 8cmh, A
(373)



XII-6, 32cmh, A
(374)



XII-7, 8cmh, A
(375)



XII-8, 20cmh, A
(376)



XII-9, 8cmh, A
(377)



XII-10, 25cmh, A
(378)



XII-11, 13cmh, A
(379)



XII-12, 11cmh, A
(380)



XII-13, 8cmh, A
(381)



XII-14, 14cmh, A
(382)



XII-15, 10cmh, A
(383)



XII-16, 7cmh, A
(384)



XII-17, 5cmh, A
(385)



XII-18, 11cmh, A
(386)



XII-19, 26cmh, A
(387)



XII-20, 27cmh, A
(388)



XII-21, 36cmh, A
(389)



XII-22, 16cmh, A
(390)



XII-23, 8cmh, A
(391)



XII-24, 9cmh, A
(392)



XII-25, 13cmh, A
(393)



XII-26, 28cmh, A
(394)



XII-27, 9cmh, A
(395)



XII-28, 10cmh, A
(396)



XII-29, 8cmh, A
(397)



XII-30, 13cmh, A
(398)



XII-31, 20cmh, A
(399)



XII-32, 10cmh, A
(400)



XII-33, 19cmh, A
(401)



XII-34, 11cmh, A
(402)



XII-35, 12cmh, A
(403)



XII-36, 34cmh, A
(404)



XII-37, 20cmh, A
(405)



XII-38, 11cmh, A
(406)



XII-39, 9cmh, A
(407)



XII-40, 14cmh, A
(408)



XII-41, 10cmh, A
(409)



XII-42, 19cmh, A
(410)



XII-43, 13cmh, A
(411)



XII-44, 18cmh, A
(412)



XII-45, 25cmh, A
(413)



XII-46, 15cmh, A
(414)



XII-47, 20cmh, A
(415)



XII-48, 8cmh, U
(416)



XII-49, 9cmh, A
(417)



XII-50, 3cmh, U
(418)



XII-51, 10cmh, A
(419)



XII-52, 32cmh, A
(420)



XII-53, 29cmh, A
(421)



XII-54, 10cmh, A
(422)



XII-55, 7cmh, A
(423)



XII-56, 6cmh, A
(424)



XII-57, 11cmh, A
(425)



XII-58, 11cmh, A
(426)



XII-59, 11cmh, A
(427)



XII-60, 12cmh, A
(428)



XII-61, 14cmh, A
(429)



Ph. 12-a (XII/1-6)



Ph. 12-b (XII/7-10.16-19)



Ph. 12-c (XII/11-15)



Ph. 12-d (XII/21-30)



Ph. 12-e (XII/31-35)



Ph. 12-f (XII/36-42)



Ph. 12-g (XII/43-45, 53-61)



Ph. 12-h (XII/46-52)



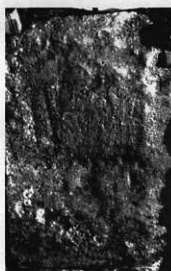
S70a (XII/1-4)



S65 (XII/5-7)



S46 (XII/8-10, 18-19)



S28 (XII/11)



S59 (XII/19-21)



S64 (XII/12-15)



S32 (XII/21-23)



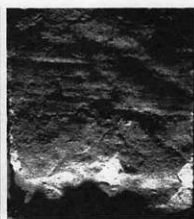
S34 (XII/24-30)



S92 (XII/47)



S93 (XII/49-52)



S16 (XII/53-54)



S76 (XII/30-35)



S78 (XII/34-38)

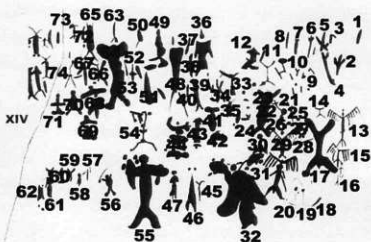


S33 (XII/40-45)

Note:

このセクションは、「平面図」の「D2号」区の地面から1m～2mの範囲にある場所で、岩面全体が少しだけ上を向いて傾いており、現在の足場からは最も観察しやすいということもあってか、フゴッペ洞窟・岩面刻画の中でも、注目されることの多い部分である。セクションXIの右部分と同様、かつて緑色バクテリアに深く覆われていたが、現状はやや改善されている。XII-10の人物像を中心とする部分には、「実測図」においては幅の厚い「船」らしきかたちが記録されているが、今回の「図面」では、「刻まれた」内部の分析から剥落部分と判断した。それで剥落部分の上下にわたる、ある程度サイズの大きい人物像などを確認した。XII-21はフゴッペ洞窟・岩面刻画を代表する「有翼」の威容を誇る人物像である。また、他の作品にはない指の表現も、5本ではないものの、認められ、このような細部に富んだ作品は、やはり、制作時においても重要な役割を果たしていたと推測される。はっきりと「有翼」である作品は、この周囲と下のセクションXIIIに限られていて、やはり特別な意味を有していたと判断すべきかもしれない。XII-11の下付近に「実測図」では記録されている列状の点も、今回は剥落の跡と見なした。同様に、XII-30からXII-35の下の部分に「実測図」では「船とその乗員」らしきかたちが記録されているが、今回はこの「船」も剥落部分であると考えた。さらに、「実測図」では、XII-45の左部分に大きなかたちを想定しているようだが、現在では岩面の状態がよくなく、制作の痕跡は窺えるものの、今回は明確なかたちをひとつも見いだすことができなかった。このセクションは、フゴッペ洞窟の中でも、岩質が軟らかい部分であり、そのために、アブレイジョンによる彫りも深く、印象的な作品も多いが、損傷の度合いも甚だしいようであり、今後とも保存に最も留意すべきところである。

Section XIII



XIII-1, 8cmh, U
(430)

XIII-2, 13cmh, U
(431)

XIII-3, 6cmh, U
(432)

XIII-4, 19cmh, A
(433)

XIII-5, 11cmh, U
(434)



XIII-6, 12cmh, U
(435)

XIII-7, 9cmh, U
(436)

XIII-8, 10cmh, U
(437)

XIII-9, 15cmh, U
(438)

XIII-10, 12cmh, A
(439)



XIII-11, 20cmh, A
(440)



XIII-12, 13cmh, A
(441)



XIII-13, 23cmh, A
(442)



XIII-14, 7cmh, A
(443)



XIII-15, 14cmh, A
(444)



XIII-16, 13cmh, A
(445)



XIII-17, 32cmh, A
(446)



XIII-18, 15cmh, A
(447)



XIII-19, 16cmh, A
(448)



XIII-20, 11cmh, A
(449)



XIII-21, 4cmh, A
(450)



XIII-22, 7cmh, A
(451)



XIII-23, 30cmh, A
(452)



XIII-24, 20cmh, U
(453)



XIII-25, 10cmh, U
(454)



XIII-26, 12cmh, U
(455)



XIII-27, 11cmh, U
(456)



XIII-28, 10cmh, A
(457)



XIII-29, 16cmh, A
(458)



XIII-30, 12cmh, A
(459)



XIII-31, 26cmh, A
(460)



XIII-32, 45cmh, P
(461)



XIII-33, 15cmh, A
(462)



XIII-34, 13cmh, A
(463)



XIII-35, 11cmh, A
(464)



XIII-36, 34cmh, A
(465)



XIII-37, 10cmh, A
(466)



XIII-38, 13cmh, A
(467)



XIII-39, 18cmh, A
(468)



XIII-40, 11cmh, A
(469)



XIII-41, 14cmh, P
(470)



XIII-42, 7cmh, P
(471)



XIII-43, 18cmh, P
(472)



XIII-44, 24cmh, P
(473)



XIII-45, 12cmh, U
(474)



XIII-46, 24cmh, U
(475)



XIII-47, 18cmh, U
(476)



XIII-48, 44cmh, U
(477)



XIII-49, 21cmh, P
(478)



XIII-50, 10cmh, A
(479)



XIII-51, 22cmh, U
(480)



XIII-52, 11cmh, U
(481)



XIII-53, 12cmh, U
(482)



XIII-54, 25cmh, U
(483)



XIII-55, 40cmh, P
(484)



XIII-56, 16cmh, U
(485)



XIII-57, 8cmh, U
(486)



XIII-58, 7cmh, U
(487)



XIII-59, 8cmh, U
(488)



XIII-60, 9cmh, U
(489)



XIII-61, 17cmh, U
(490)



XIII-62, 15cmh, U
(491)



XIII-63, 12cmh, U
(492)



XIII-64, 37cmh, P
(493)



XIII-65, 22cmh, A
(494)



XIII-66, 15cmh, P
(495)



XIII-67, 14cmh, P
(496)



XIII-68, 19cmh, P
(497)



XIII-69, 14cmh, P
(498)



XIII-70, 14cmh, P
(499)



XIII-71, 12cmh, *P* XIII-72, 12cmh, *A* XIII-73, 9cmh, *A* XIII-74, 20cmh, *U*
(500) (501) (502) (503)



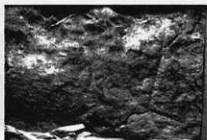
Ph. 13-a (XIII/13-20, 26-29, 31)



Ph. 13-b (XIII/32)



S91 (XIII/1-5)



S63a (XIII/6-8)



S13 (XIII/13-17)



S29b (XIII/18-20)



S55b (XIII/25-27)



S83 (XIII/29,31)



S36 (XIII/22-24)



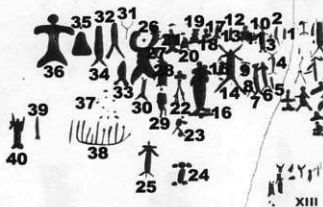
S14 (XIII/30-32)

Note:

このセクションは、セクション XIV と完全に連続しているが、今回の図面では、10分の1の縮尺でA4版に図面を取めるという、ただ便宜的な理由により、左下がりに走る亀裂を境界にして、ふたつのセクションとした。ふたつのセクションは、「平面図」の「B号」区から「D2号」区にかけての地面から1mまでの範囲に長さ約3mにわたって広がっている部分である。XIII-32の大きな人物像は「実測図」では、脚部の先まで記録されているが、現状では少々地面に埋まっているようである。他にも、「実測図」にも記録されていない作品がまだ地中に残っているかもしれないが、実際に作品があるかどうかは今後の再発掘によってしか明らかできないだろう。これらのセクション全体に保存状態はそれほどよくなく、それはセクション XII と同様に、岩質がもともと硬くないことから、風化が進んだせいだろう。セクション XIII の右半分には、アブレイジョンによる作品が多いが、損傷を受けているものもあり、例えば、XIII-17の人物像は、「実測図」では左を向いて右手で剣を突きだしているようにも記録されているが、今回の調査で頭部

と見なされているのは剝落部分であり、剣も削磨面の浅さから別の作品の部部であると判断した。このセクションはかなり集中して作品が制作されているので、かたちが錯綜してひとつの作品をどの範囲までにするか難しい場合もあり、今後さらに改訂する必要があるともいえよう。ただし、アプレイジョンとベッキングによる作品間にも重ねがきは認められない。このセクションの左半分からセクション XIV にかけては、ベッキングによる作品が多く、もともと軟らかい岩質のせいもあって、風化が相当進んでいて、かたちを見極めるのは簡単ではなかった。XIII-55 の 40cm の高さの人物像の付近も「実測図」では全く空白部分のまま残されている。

Section XIV



XIV-1, 9cmh, A
(504)



XIV-2, 14cmh, A
(505)



XIV-3, 6cmh, U
(506)



XIV-4, 17cmh, A
(507)



XIV-5, 7cmh, U
(508)



XIV-6, 18cmh, A
(509)



XIV-7, 21cmh, A
(510)



XIV-8, 9cmh, A
(511)



XIV-9, 8cmh, A
(512)



XIV-10, 10cmh, A
(513)



XIV-11, 7cmh, P
(514)



XIV-12, 10cmh, P
(515)



XIV-13, 9cmh, P
(516)



XIV-14, 29cmh, A
(517)



XIV-15, 13cmh, P
(518)



XIV-16, 31cmh, P
(519)



XIV-17, 12cmh, P
(520)



XIV-18, 9cmh, P
(521)



XIV-19, 9cmh, P
(522)



XIV-20, 15cmh, P
(523)



XIV-21, 15cmh, P
(524)



XIV-22, 19cmh, P
(525)



XIV-23, 12cmh, P
(526)



XIV-24, 13cmh, P
(527)



XIV-25, 21cmh, A
(528)



XIV-26, 35cmh, P
(529)



XIV-27, 7cmh, P
(530)



XIV-28, 17cmh, P
(531)



XIV-29, 17cmh, P
(532)



XIV-30, 13cmh, P
(533)



XIV-31, 11cmh, /
(534)



XIV-32, 20cmh, P
(535)



XIV-33, 15cmh, P
(536)



XIV-34, 23cmh, P
(537)



XIV-35, 16cmh, P
(538)



XIV-36, 30cmh, P
(539)



XIV-37, 17cmh, P
(540)



XIV-38, 14cmh, A
(541) (34cmw)



XIV-39, 14cmh, A
(542)



XIV-40, 20cmh, A
(543)



Ph. 14-a(XIV/1-30)



Ph. 14-b (XIV/ 30,37)



Ph. 14-c(XIV/38)



S75 (XIV/8-9, 13-15)



S56 (XIV/28)



S17 (XIV/26,30)



S68 (XIV/31-34)



S38 (XIV/38)

Note:

セクション XIII に連続しているこのセクションでも、ほとんどがベッキングによる作品であり、「実測図」ではまばらにしかかたちが記録されていないが、今回の調査では、多くの作品が集的に制作されているのを確認した。例えば、XIV-21 の人物像は「実測図」では、縦長の楕円としてしか表されていないが、実際にはベッキングにより刺がされた面が連続して柔らかな輪郭線を形成していて、エレガントな作品に仕上がっている。他の作品でも描きおこしが円の集合として表されているのは、ベッキングによる作品の味わいを伝えようとしたものだが、残念ながらあまり成功しているとはいえない。XIV-37 は下方の部分が下の「船」と関連する、太鼓か何かの表現という解釈もあったが、今回はベッキングによる浅い円の集合が作り上げた人物像と考えてみた。XIV-38 の「船」はフゴッペ洞窟・岩面刻画の中でもよく知られている作品であり、アブレイジョンによるシャープな線が大きなサイズの船を力強く作り上げている。8~10 人が乗っている規模の大きな船であり、海岸というフゴッペ洞窟のある地理的特色を如実に物語ることもいえよう。このような船を利用して、フゴッペ洞窟に岩面刻画を残した人々も移動していたのかもしれない。同じような造形感覚による船の表現はシベリアをはじめとする北東アジアの岩面画遺跡においても散見され、フゴッペで唯一大體との関連性を伝える作例となっている。

Section XV

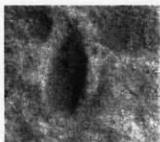
2/1



XV-1, 10cmh, A
(544)



XV-2, 10cmh, A
(545)



Ph. 15 (XV/1-2)

Note:

このセクションは、セクション XVII とセクション XIX の境界にある水平面の小さなテラス状の場所である。フゴッペでは次のセクション XVI でも水平面に制作されており、このような場所に制作されているのは世界的に見ても珍しい造形現象といえるだろう。地面に制作された作品は洞窟壁画などにもあるが、踏まれるなどして破壊されることも多く、残らなかった例もあっただろう。フゴッペ洞窟では、作品の制作された水平面が比較的高い場所にあったため、幸いにも保存されたのだろう。このセクションには「実測

図」では5作品程度が記録されているが、現状では2作品しか確認できなかった。「実測図」の作成後平面に堆積した砂が固着して作品を隠しているだけかもしれないので、今後慎重に硬化した砂を除去する必要があるともいえよう。

Section XVI



XVI-1, 10cmh, /
(546)

OFF



XVI-2, 7cmh, A
(547)



XVI-3, 8cmh, /
(548)



XVI-4, 5cmh, A
(549)



XVI-5, 8cmh, A
(550)(10cmw)



XVI-6, 17cmh, A
(551)



XVI-7, 11cmh, A
(552)



XVI-8, 8cmh, A
(553)



XVI-9, 20cmh, A
(554)



Ph.16 (XVI/2-9)



S77 (XVI/3-9)

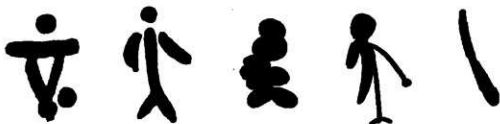
Note:

このセクションも、前のセクション XV と同じく、水平面に制作されている。セクション XVII の上の水平面であり、制作当初はもっと広い範囲を占めていた可能性もある。「実測図」作成当方で 20 近い作品が記録されているが、今回は 9 作品を確認するにとどまった。70 年の報告書では、この部分は制作後いち早く堆積物に埋没して、「非常に新鮮である」と、図版キャプションに記述されているが、前のセクション同様、堆積物が固着しているためか、保存状況は現在ではそれほどよいとはいえない。ただ、XVI-9 はアブレイジョンによる典型的な人物像が鮮明に残されている例であるといえる。

Section XVII



XVII-1, 13cmh, A (555) XVII-2, 15cmh, A (556) XVII-3, 19cmh, A (557) XVII-4, 15cmh, A (558) XVII-5, 23cmh, A (559)



XVII-6, 15cmh, A (560) XVII-7, 19cmh, A (561) XVII-8, 12cmh, P (562) XVII-9, 24cmh, A (563) XVII-10, 14cmh, A (564)



XVII-11,19cmh,A
(565)



XVII-12,21cmh,A
(566)



XVII-13,18cmh,A
(567)



XVII-14,26cmh,A
(568)



XVII-15,15cmh,A
(569)



XVII-16,10cmh,A
(570)



XVII-17,25cmh,A
(571)



XVII-18,11cmh, A
(572)



XVII-19,32cmh,A
(573)



XVII-20,30cmh,A
(574)



XVII-21,33cmh,A
(575)



XVII-22,11cmh,A
(576)



XVII-23,13cmh,A
(577)



XVII-24,14cmh,A
(578)



XVII-25,16cmh,A
(579)



XVII-26,9cmh,A
(580)



XVII-27,10cmh,A
(581)



XVII-28,20cmh,A
(582)



XVII-29,27cmh,A
(583)



XVII-30,20cmh,A
(584)



Ph. 17-a (XVII/1-5)



Ph. 17-b (XVII/3-14)



Ph. 17-c (XVII/14-24)



Ph. 17-d (XVII/17-29)



S67 (XVII/2-5)



S81 (XVII/6-8)



S55a (XVII/9-10)



S62 (XVII/11-13)



S20 (XVII/14-17)



S71 (XVII/18-20)



S15 (XVII/21-25)



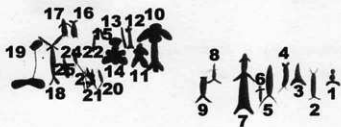
S72 (XVII/26-29)

Note:

このセクションは、「平面図」の「D2号」区の地面から約2m50cmの高さからはじまり、50cmの幅で左右に約2mにわたってフリーズ状に展開している。地面からは見上げる角度にあり、ほとんどアブレイジョンだけが用いられている、統一感あふれたスペクタクルな部分である。保存状態も良好で、「実測図」においてもほぼ正確に記録されているが、どういった作品が制作されているのかは、深くえぐられた部分それぞれを「船状窩」と呼ぶだけで、積極的には解釈されてこなかったようである。確かにこの部分の解釈は難しいが、筆者は、フゴッペ洞窟において独創的に工夫されたアブレイジョンという技法が、このセクションで最大限に洗練されて、抽象的な人物像の集合を実現したと考えている。鋭くえぐり取られた「船状窩」ひとつひとつが人体の胴や手足など各部分を表していて、いくつかの「船状窩」でひとつの人物像が表現されているのである。今回の「図面」では、30の人物像を数えたが、これはカタログ作成時点での

筆者の判断に基づいており、今後の語氏による調査研究が他の捉え方をすることも十分にあり得るだろう。例えば、XVII-17 では、下向きの馬蹄形ふたつがひとつの人物像を形成していると、筆者は解釈しているのだが、いかがなものだろうか。

Section XVIII



XVIII-1, 10cmh, A
(585)



XVIII-2, 18cmh, A
(586)



XVIII-3, 13cmh, A
(587)



XVIII-4, 17cmh, A
(588)



XVIII-5, 25cmh, A
(589)



XVIII-6, 9cmh, A
(590)



XVIII-7, 33cmh, A
(591)



XVIII-8, 12cmh, A
(592)



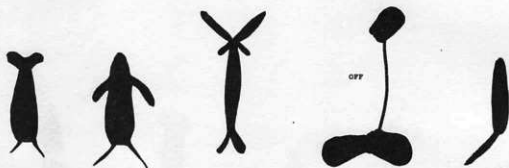
XVIII-9, 15cmh, A
(593)



XVIII-10, 27cmh, P
(594)



XVIII-11, 14cmh, P (595) XVIII-12, 12cmh, P (596) XVIII-13, 12cmh, P (597) XVIII-14, 15cmh, P (598) XVIII-15, 6cmh, P (599)



XVIII-16, 11cmh, A (600) XVIII-17, 12cmh, A (601) XVIII-18, 28cmh, A (602) XVIII-19, 28cmh, A (603) XVIII-20, 12cmh, A (604)



XVIII-21, 12cmh, A (605) XVIII-22, 10cmh, P (606) XVIII-23, 12cmh, A (607) XVIII-24, 16cmh, A (608) XVIII-25, 11cmh, P (609)



Ph. 18-a (XVIII/1-9)

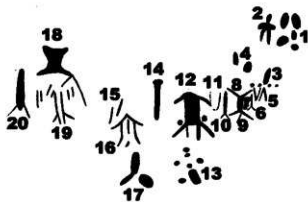


Ph. 18-b (XVIII/14-25)

Note:

このセクションは、セクションXIIの左側に広がっており、「平面図」の「D2号」区から「D3号」区の地面から1m50cmから2mまでの場所を占めている。岩質が脆弱なためか、風化はかなり進んでおり、それぞれの作品のかたちを決定するのは簡単な作業ではなかった。技法を分析すると、ベッキングとアブレイジョンが併置されるように用いられていて、作者たちの、フゴッペならではの岩質に対する試行錯誤がありありと目に見えてくるような気がする。

Section XIX



XIX-1, 21cmh, A
(810)



XIX-2, 17cmh, A
(811)



XIX-3, 10cmh, U
(812)



XIX-4, 12cmh, U
(813)



XIX-5, 9cmh, A
(814)



XIX-6, 9cmh, A
(815)



XIX-7, 5cmh, A
(816)



XIX-8, 19cmh, A
(817)



XIX-9, 6cmh, A
(818)



XIX-10, 19cmh, A
(819)



XIX-11, 11cmh, / XIX-12, 26cmh, A XIX-13, 20cmh, P XIX-14, 23cmh, A XIX-15, 15cmh, A
 (620) (621) (622) (623) (624)



XIX-16, 19cmh, A XIX-17, 20cmh, A XIX-18, 18cmh, A XIX-19, 27cmh, A XIX-20, 26cmh, A
 (625) (626) (627) (628) (629)



Ph. 19-a(XIX/3-17)



Ph. 19-b (XIX/19-20)

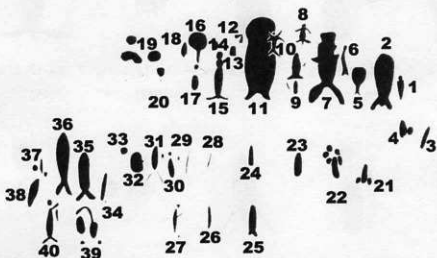


S18 (XIX/11-12)

Note:

このセクションは、前のセクションの左上に延びており、「平面図」の「D8号」区、地面から2m～2m50cmの範囲に展開している。この部分の岩質も前のセクション XVIII と変わりなく、やはり画像決定は容易ではない。XIX-1 と XIX-2 は、技法的には、セクション XVII と同じものであり、抽象化された人物像が表現されているだろうが、便宜的にこのセクションに含めたものである。XIX-12 も XIX-16 も、共にアプレイジョンによるかたちが風化して、より深く刻み込まれていたであろう輪郭線だけが残っているものだろうが、比較的保存のよい前者は、作者たちが意図したであろうかたちを面的に描きおこし、後者は線的に再現したにすぎない。統一性がないとの非りを受けるだろうが、現時点での各作品に対する印象も加味せざるをえず、それだけ、かたちが生き続けていて絶えず変化しているのだともいえよう。

Section XX



XX-1, 14cmh, P
(630)



XX-2, 31cmh, P
(631)



XX-3, 13cmh, P
(632)



XX-4, 10cmh, P
(633)



XX-5, 16cmh, P
(634)



XX-6, 17cmh, P
(635)



XX-7, 40cmh, P
(636)



XX-8, 12cmh, P
(637)



XX-9, 23cmh, P
(638)



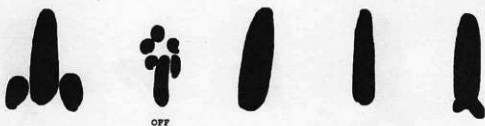
XX-10, 15cmh, P
(639)



XX-11, 46cmh, P (640) XX-12, 5cmh, P (641) XX-13, 6cmh, P (642) XX-14, 5cmh, P (643) XX-15, 27cmh, P (644)



XX-16, 18cmh, P (645) XX-17, 15cmh, U (646) XX-18, 11cmh, U (647) XX-19, 15cmh, P (648) XX-20, 15cmh, U (649)



XX-21, 12cmh, P (650) XX-22, 18cmh, P (651) XX-23, 13cmh, P (652) XX-24, 11cmh, P (653) XX-25, 17cmh, P (654)



XX-26, 13cmh, P (655) XX-27, 16cmh, A (656) XX-28, 10cmh, U (657) XX-29, 14cmh, U (658) XX-30, 15cmh, P (659)



XX-31, 21cmh, U
(660)



XX-32, 11cmh, P
(661)



XX-33, 4cmh, P
(662)



XX-34, 16cmh, P
(663)



XX-35, 26cmh, P
(664)



XX-36, 34cmh, P
(665)



XX-37, 10cmh, P
(666)



XX-38, 16cmh, P
(667)



XX-39, 21cmh, P
(668)



XX-40, 24cmh, P
(669)



Ph.20-a (XX/1-3)



Ph.20-b (XX/11-20)



Ph. 20-c (XX/10-20)



Ph. 20-d (XX/24-33)



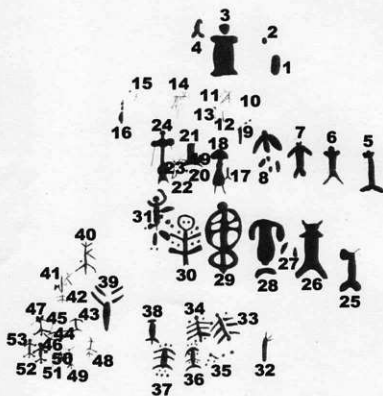
Ph. 20-e (XX/35-36)

Note:

このセクションは、「平面図」の「D3号」区の右半分、地面から1m50cmまでの場所にある。現在も維持されている「残置貝層」のまさに裏側というところであり、「実測図」では特にこのセクションの下半分が奇妙な「空白地帯」とでもいうべき部分となっている。しかし、ここの多くの作品があることは従来から指摘されており、それが「実測図」を全面改訂した今回の「図面」の作成につながったともいえる。風化も相当程度進んでいて、画像を決定するには困難を伴った。XX-11 はベッキングによる幅広の人物像であり、風化の効果もあってか茫洋とした雰囲気を感じ出しているが、特筆すべきは、その右肩に当たる部分に、同じベッキングによる小さな人物像、XX-10 が部分的に重ねがきされていることであり、フゴッペ洞窟・岩面刻面においては同技法による重ねがきの唯一の事例である。重なりを分析すると、XX-10の方が後に制作されたようだが、技法が同じである以上、XX-11の広がりがある場所と認識されないうまま、重ねがきされてしまったのではないかと、筆者は考えている。すなわち、重ねがきがあるからと

いって、作者は異なるだろうが、それほど時間の隔たりがなくてもかまないのではないかということである。他の作品もほとんどすべてベッキングにより制作されているが、それがこの部分の岩質に適さない技法であったため、制作当初から明確なかたちにはなっていなかったとも推測される。

Section XXI



XXI-1, 11cmh, P (670)



(671)



XXI-3, 19cmh, P (672)



XXI-4, 11cmh, P (673)



XXI-5, 23cmh, A (674)



XXI-6, 21cmh, A
(675)



XXI-7, 20cmh, A
(676)



XXI-8, 22cmh, A
(677)



XXI-9, 14cmh, A
(678)



XXI-10, 7cmh, I
(679)



XXI-11, 13cmh, I
(680)



XXI-12, 6cmh, U
(681)



XXI-13, 7cmh, U
(682)



XXI-14, 16cmh, I
(683)



XXI-15, 6cmh, I
(684)



XXI-16, 19cmh, P
(685)



XXI-17, 8cmh, A
(686)



XXI-18, 25cmh, A
(687)



XXI-19, 6cmh, A
(688)



XXI-20, 5cmh, A
(689)



XXI-21, 15cmh, A
(690)



XXI-22, 4cmh, A
(691) (8cmw)



XXI-23, 10cmh, A
(692)



XXI-24, 29cmh, A
(693)



XXI-25, 25cmh, A
(694)



XXI-26, 32cmh, A
(695)



XXI-27, 8cmh, A
(696)



XXI-28, 33cmh, A
(697)



XXI-29, 40cmh, A
(698)



XXI-30, 28cmh, A
(699)



XXI-31, 33cmh, A
(700)



XXI-32, 17cmh, A
(701)



XXI-33, 18cmh, A
(702)



XXI-34, 15cmh, A
(703)



XXI-35, 10cmh, A
(704)(15cmw)



XXI-36, 16cmh, A
(705)



XXI-37, 19cmh, A
(706)



XXI-38, 14cmh, A
(707)



XXI-39, 26cmh, A
(708)



XXI-40, 19cmh, I
(709)



XXI-41, 11cmh, I
(710)



XXI-42, 5cmh, I
(711)



XXI-43, 8cmh, A
(712)



XXI-44, 12cmh, I
(713) (19cmw)



XXI-45, 12cmh, I
(714)



XXI-46, 12cmh, /
(715)



XXI-47, 12cmh, A
(716)



XXI-48, 13cmh, A
(717)



XXI-49, 14cmh, A
(718)



XXI-50, 8cmh, A
(719)



XXI-51, 10cmh, /
(720)



XXI-52, 12cmh, A
(721)



XXI-53, 11cmh, A
(722)



Ph.21-a (XXI/3-4)



Ph.21-b (XXI/10-13)



Ph.21-c (XXI/14-16)



Ph.21-d (XXI/17-24)



Ph.21-e (XXI/27-28)



Ph.21-f (XXI/29-30)



Ph.21-g (XXI/31)



Ph.21-h (XXI/32)



Ph.21-i(XXI/33-38)



Ph.21-j (XXI/40-41)



Ph.21-k (XXI/45-53)



S86 (XXI/19-21)



S24 (XXI/23-24)



S90 (XXI/ 26)



S37 (XXI/27-28)



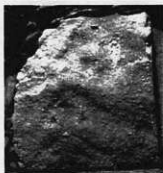
S80 (XXI/30-31)



S63b (XXI/30)



S70b (XXI/40)



S49a (XXI/35-36)



S49b (XXI/37)



S9 (XXI/48-50)



S74 (XXI/44-53)



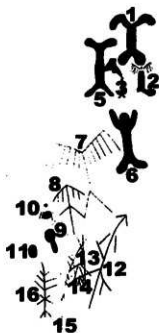
S61a (XXI/52-53)

Note:

このセクションは、「平面図」の「D3号」区の中央部の地面から2m50cmに及ぶ高さのある、縦長の部分である。フゴッペ洞窟・岩面刻画の他のセクションに比べても特色ある作品が多く、見ごたえがあると

いえよう。XXI-8 はベッキングによる幅広の人物像であり、その存在感から峰山巖氏が「村の哲人」と名付けた作品である。XXI-21 は人物像の下半分の輪郭線だけが際だっており、上半身の痕跡も認められないが、これは完全に風化したためなのか、もともと上半身部分が制作されなかったのか、興味深い作例である。XXI-24 は洞内で相対する III-4 と感覚の類似する人物像であり、このふたつの作品が意図的に配置されているとすれば、フゴッペ洞窟・岩面刻画にもある種の構造が潜んでいるということになるだろう。XXI-29 と XXI-30 は、従来「シュロの木」とシャーマニズムに関連する解釈がなされている、フゴッペ洞窟・岩面刻画においても特異な表現であるが、筆者はきわめて図式化された人物像であろうと考えている。これらを人物像と解釈するに当たっては、別のところで詳論しなければならない「図式化」概念など複雑な問題も多くあり、ここでは割愛したい。同様に、XXI-33 から XXI-37 にかけての点を多く配した奇妙なかたちに関しても、筆者は図式化された人物像と見なしている。XXI-44 の線による船のようなかたちは、シャーマニズムの儀礼と関わる解釈がされることも多いが、これをどう捉えるかは、この部分の特定のかたちだけにこだわるのではなく、フゴッペ洞窟・岩面刻画全体の中に位置づけてはじめて議論が可能だろう、とだけここでは記しておきたい。XXI-52 と XXI-53 の人物像も、踊るような姿勢からシャーマニズムと絡めて解釈されているが、これも人物像の「図式化」のプロセスの中で現れうるかたちであり、必ずしも写実主義的にのみ考える必要はないだろう。

Section XXII



XXII-1, 25cmh, P (723) XXII-2, 18cmh, P (724) XXII-3, 11cmh, A (725) XXII-4, 9cmh, A (726) XXII-5, 27cmh, A (727)



XXII-6, 30cmh, P
(728)



XXII-7, 41cmh, /
(729)



XXII-8, 24cmh, /
(730)



XXII-9, 9cmh, /
(731)



XXII-10, 23cmh, P
(732)



XXII-11, 6cmh, P
(733)



XXII-12, 43cmh, /
(734)



XXII-13, 26cmh, /
(735)



XXII-14, 10cmh, /
(736)



XXII-15, 37cmh, /
(737)



XXII-16, 27cmh, /
(738)



Ph.22-a (XXII/1-5)



Ph.22-b (XXII/6)



Ph.22-c (XXII/8-16)



S19 (XXII/3-5)



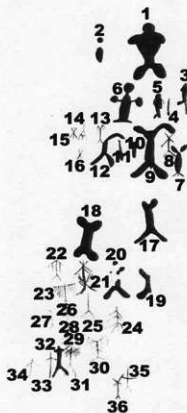
S82 (XXII/13-16)

Note:

このセクションは、「平面図」の「D3号」区の左端、前のセクションXXIから直角に折れ曲がった面であり、岩面は洞根部、すなわち東を向いている。外側に面しているためか、保存状態はあまりよくなく、作品も部分的には破損している場合もあり、画像決定は簡単ではなかった。「実測図」ではXXII-3とXXII-4を合わせて「左を向くトリ」のような形象を記録しているが、前者は頭部が後者に重ねて記されて見えなくなった人物像であり、後者もまた上半身が風化等により見えなくなった人物像の断片であると、今回は判断した。XXII-7からXXII-16までのほとんどの作品は、インサイジョンによる作品で、風化も進んでいて、多くの線が錯綜しているだけのようにも見え、かたちを抽出することは容易ではないが、いくつかの図式化の進んだ「樹状」人物像が重なり合っている部分と見えた。このような図式化された人物像は相対的に見ればより新しい時代の制作という考え方もあり、フゴッペ洞窟・岩面刻画の中でも、入り口に近いこの部分にもっとも新しい作品があるというのも大いにありそうだが、この全作品間の相対的な制作年

代決定は、今後さらに議論すべき問題であろう。

Section XXIII



XXIII-1, 32cmh, P (739) XXIII-2, 14cmh, P (740) XXIII-3, 18cmh, P (741) XXIII-4, 10cmh, U (742) XXIII-5, 14cmh, P (743)



XXIII-6, 21cmh, P
(744)



XXIII-7, 18cmh, A
(745)



XXIII-8, 14cmh, A
(746)



XXIII-9, 34cmh, A
(747)



XXIII-10, 8cmh, A
(748)



XXIII-11, 12cmh, A
(749)



XXIII-12, 19cmh, A
(750)



XXIII-13, 11cmh, /
(751)



XXIII-14, 9cmh, /
(752)



XXIII-15, 9cmh, /
(753)



XXIII-16, 7cmh, /
(754)



XXIII-17, 26cmh, P
(755)



XXIII-18, 25cmh, P
(756)



XXIII-19, 18cmh, P
(757)



XXIII-20, 21cmh, P
(758)



XXIII-21, 19cmh, /
(759)



XXIII-22, 12cmh, /
(760)



XXIII-23, 12cmh, /
(761)



XXIII-24, 15cmh, /
(762)



XXIII-25, 14cmh, /
(763)



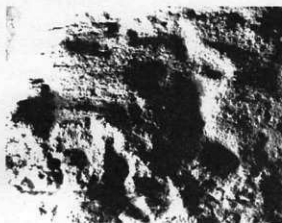
XXIII-26, 9cmh, / (764) XXIII-27, 13cmh, / (765) XXIII-28, 5cmh, / (766) XXIII-29, 8cmh, / (767) XXIII-30, 15cmh, / (768)



XXIII-31, 19cmh, / (769) XXIII-32, 18cmh, A (770) XXIII-33, 15cmh, / (771) XXIII-34, 12cmh, / (772)



XXIII-35, 15cmh, / (773) XXIII-36, 15cmh, / (774)



Ph.23-a (XXIII/1-2)



Ph.23-b (XXIII/3-11)



Ph.23-c (XXIII/17)



Ph.23-d (XXIII/21-26,28)



Ph.23-f (XXIII/30)



Ph.23-g (XXIII/31-34)



Ph.23-h (XXIII/ 35-36)



S58 (XXIII/7-10)

Note:

このセクションは、前のセクション XXII がさらに直角に折れ曲がった岩面にあり、北、すなわち洞内方向に面しているため、まだ風化はおさえられているようである。このセクションには上方には主にベッキングが、中段にはアブレイジョンが、そして地面に近いところではインサイジョンという技法が、それぞれ優勢である。技法と制作年代の関係は難しい問題だが、このセクションの技法の使い分けが、何らかのヒントになるかもしれない。地面に近い部分の XXIII-21 から XXIII-36 まではインサイジョンによるやや図式化された人物像がほとんどであり、これは前のセクション XXII との連続性を感じさせるが、図式化の度合いは比較的ゆるいようである。XXIII-35 と XXIII-36 は下半分が現在の地面に埋まっていて、XIII-32 の部分と同じように、この下の土中の岩面にもまだ作品が潜んでいるのではないかと思われる。

Section XXIV

†
1

†
2



XXIV-1, 14cmh, P
(775)



XXIV-2, 12cmh, I
(776)



Ph.24 (XXIV/2)

Note:

このセクションは、前のセクション XXIII がもう一度折れ曲がった岩面であり、東、すなわち洞外に面しているため、風化が極端に進んでいる部分である。その上、現在の保護屋の壁面がこのセクションの左端部分を覆うようにつくられていて、そのためいくつかの作品が消失した恐れもある。「実測図」では 18 の作品が記録されているが、今回の調査では、2 点しか確認することができなかった。作品の痕跡らしきものはまだまだ散見されるので、今後さまざまな機器を用いて、失われようとしている作品の本来の姿をよみがえらせる必要があるかもしれない。

Section 0



Ph.0 (0/2-3) : courtesy of Yoichi Fishery Museum



S50b(0/1)

Note:

このセクションは、「平面図」における「C1号」区の「最北端彫刻」と称されている部分であり、1970年に竣工した保護屋の壁面の外側に現在はある。長らく、発掘後に埋め戻されたと考えられてきたが、2002年9月に新保護屋建築工事に伴って「再発見」され、3点の作品は急速このカタログにも加えたものである。筆者はこの文章の執筆時点で作品の実見を果たせておらず、調査研究による描きおこしも作成できないままである。また、作品の通し番号も付していない。

3点の作品は、右に鋭い線による「人物像」があり、現在は風化のためか存在が確認しがたいようであ

るが、石膏型「S50b」には明確にかたちが印されている。中央の「サカナ」と称される作品は、現在でも明確に残っているが、その「サカナ」という解釈については、洞内に類似の作品が見いだせない以上、留保しておきたい。左端のかたちは「報告書」において「漁撈装置」と称されているが、ここでは「人物像」の一種と見なしておきたい。現在では、右の人物像ほどではないが、風化の度合いはある程度進んでいるようである。なお、「報告書」に添付されている「実測図」では、「サカナ」の上方に人物像の一部らしき菱形を基調としたかたちがあるが、これは現在未確認である。

Copies in plaster, not identified

(at the moment, 020913)



S7a



S7b



S25d

Note:

北海道開拓記念館に所蔵されている石膏型は 111 の数に上るが、長期の調査研究によっても、最終的に 3 個の石膏型がフゴッペ洞窟・岩面刻画の中のどの作品の部分の複写したものか同定することができなかつた。S7a と S25d は、特徴のあるかたちではないが、まだ複写面が鮮明なので、今後同定可能である。しかし、S7b は複写面が相当程度破壊されていて、今後とも同定は難しいだろう。次の 2 ページにわたって石膏型のリストを掲載しているので、北海道開拓記念館でこの資料を調査研究する場合には、参考にしていただければ幸いである。

List of Copies in Plaster, deposited in Hokkaido Historical Museum

| No. | Prop.No. | Fo. | Sec. | figures | No. | Prop.No. | Fo. | Sec | figures |
|-----|----------|-----|------|----------------|-----|----------|-----|------|----------------|
| 1 | S1 | B4 | IX | 23-37 | 29 | S25a | B6 | IX | 3 |
| 2 | S2a | B5 | VI | 25 | 30 | S25b | B6 | VI | 30 |
| 3 | S2b | B5 | VIII | 9-10 | 31 | S25c | B6 | VI | 11 |
| 4 | S3 | B4 | VI | 4-5 | 32 | S25d | B6 | — | Not identified |
| 5 | S4 | B4 | VIII | 57-61 | 33 | S26 | B4 | IX | 31-33 |
| 6 | S5 | B4 | VI | 9 | 34 | S27a | B5 | VII | 20-26 |
| 7 | S6 | B4 | VIII | 13-20 | 35 | S27b | B5 | VII | 55-57 |
| 8 | S7a | B5 | — | Not identified | 36 | S28 | B4 | XII | 11 |
| 9 | S7b | B5 | — | Not identified | 37 | S29a | B5 | XI | 5-6 |
| 10 | S8a | B6 | X | 6 | 38 | S29b | B5 | XIII | 18-20 |
| 11 | S8b | B6 | X | 19 | 39 | S30 | B4 | VI | 27-29 |
| 12 | S8c | B6 | X | 23-24 | 40 | S31 | B4 | VIII | 42 |
| 13 | S9 | B4 | XXI | 48-50 | 41 | S32 | B4 | XII | 21-23 |
| 14 | S10 | B4 | XI | 1-4, 6 | 42 | S33 | B4 | XII | 40-45 |
| 15 | S11 | B4 | VII | 27-29 | 43 | S34 | B4 | XII | 24-30 |
| 16 | S12 | B4 | VI | 22-25 | 44 | S35 | B4 | IX | 14 |
| 17 | S13 | B4 | XIII | 13-17 | 45 | S36 | B4 | XIII | 22-24 |
| 18 | S14 | B4 | XIII | 30-32 | 46 | S37 | B4 | XXI | 27-28 |
| 19 | S15 | B4 | XVII | 21-25 | 47 | S38 | B4 | XIV | 38 |
| 20 | S16 | B4 | XII | 53-54 | 48 | S39 | B4 | VII | 18-19 |
| 21 | S17 | B4 | XIV | 28, 30 | 49 | S40 | B4 | VII | 45-54 |
| 22 | S18 | B4 | XIX | 11-12 | 50 | S41 | B4 | VI | 7 |
| 23 | S19 | B4 | XXII | 3-5 | 51 | S42 | B4 | IX | 4-9 |
| 24 | S20 | B4 | XVII | 14-17 | 52 | S43 | B4 | VIII | 72-78 |
| 25 | S21 | B4 | VIII | 23-28 | 53 | S44 | B4 | VII | 30-39 |
| 26 | S22 | B4 | IX | 10-14 | 54 | S45a | B5 | X | 8 |
| 27 | S23 | B4 | VIII | 29-35 | 55 | S45b | B5 | X | 1-2 |
| 28 | S24 | B4 | XXI | 23-24 | 56 | S46 | B4 | XII | 8-10, 18-19 |

| No. | Prop.No. | Fo. | Sec. | figures | No. | Prop.No. | Fo. | Sec | figures |
|-----|----------|-----|-------|-------------|-----|----------|-----|------|-----------|
| 57 | S47 | B4 | VI | 15, 17-18 | 85 | S69 | B4 | VIII | 39-44 |
| 58 | S48a | B5 | IX | 8-9 | 86 | S70a | B5 | XII | 1-4 |
| 59 | S48b | B5 | V | 22 | 87 | S70b | B5 | XXI | 40 |
| 60 | S49a | B5 | XXI | 35-36 | 88 | S71 | B4 | XVII | 18-20 |
| 61 | S49b | B5 | XXI | 37 | 89 | S72 | B4 | XVII | 28-29 |
| 62 | S50a | B5 | 0 | 1. | 90 | S73 | B4 | XI | 2-6 |
| 63 | S50b | B5 | X | Disappeared | 91 | S74 | B4 | XXI | 44-53 |
| 64 | S51 | B4 | IX | 15-16 | 92 | S75 | B4 | XIV | 8-9,13-15 |
| 65 | S52 | B4 | IX | 29-33 | 93 | S76 | B4 | XII | 30-35 |
| 66 | S53 | B4 | VI | 2-3 | 94 | S77 | B4 | XVI | 3-9 |
| 67 | S54 | B4 | VII | 34-44 | 95 | S78 | B4 | XII | 34-38 |
| 68 | S55a | B5 | XVII | 9-10 | 96 | S79 | B4 | X | 4-5 |
| 69 | S55b | B5 | XIII | 25-27 | 97 | S80 | B4 | XXI | 30-31 |
| 70 | S56 | B4 | XIV | 28 | 98 | S81 | B4 | XVII | 6-8 |
| 71 | S57 | B4 | VI | 16-20 | 99 | S82 | B4 | XXII | 13-16 |
| 72 | S58 | B4 | XXIII | 7-10 | 100 | S83 | B4 | XIII | 29,31 |
| 73 | S59 | B4 | XII | 19-21 | 101 | S84 | B4 | VI | 1-2 |
| 74 | S60 | B4 | VIII | 68-70 | 102 | S85 | B4 | X | 9-12 |
| 75 | S61a | B5 | XXI | 52-53 | 103 | S86 | B4 | XXI | 19-21 |
| 76 | S61b | B5 | X | 28-29 | 104 | S87 | B4 | VIII | 1-9 |
| 77 | S62 | B4 | XVII | 11-13 | 105 | S88 | B4 | VIII | 50-55 |
| 78 | S63a | B5 | XIII | 6-8 | 106 | S89 | B4 | VIII | 65-68 |
| 79 | S63b | B5 | XXI | 30 | 107 | S90 | B4 | XXI | 26 |
| 80 | S64 | B4 | XII | 12-15 | 108 | S91 | B4 | XIII | 1-5 |
| 81 | S65 | B4 | XII | 5-7 | 109 | S92 | B4 | XII | 47 |
| 82 | S66 | B4 | IX | 17-32 | 110 | S93 | B4 | XII | 49-52 |
| 83 | S67 | B4 | XVII | 2-5 | 111 | S94 | B4 | VII | 14-17 |
| 84 | S68 | B4 | XIV | 31-34 | — | — | — | — | — |

Format: B4; 70 items, B5;24 items, and B6; 7 items. Total; 111 plasters

Number of copied figures is approximately is 380 among 779, all figures depicted.

Rocks with Petroglyphs from Fugoppe Cave



R1 (FRwE-No.1), 21cmh × 20cmw



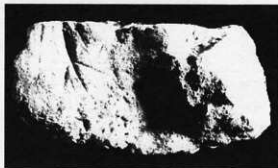
R2 (FRwE-No.2), 33cmh × 58cmw, with red ochre



R3 (FRwE-No.3), 20cmh × 33cmw



R4 (FRwE-No.4), 16cmh × 31cmw

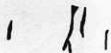




R5 (FRwE-No.7), 22cmh × 35cmw



R6 (FRwE-No.8), 22cmh × 30cmw



R7 (FRwE-No.9), 38cmh × 53cmw



R8 (FRwE-No.16), 14cmh × 14cmw



R9 (FRwE-No.19), 17cmh × 17cmw



R10 (FRwE-No.20), 19cmh × 22cmw



R11 (FRwE-No.22), 23cmh × 13cmw



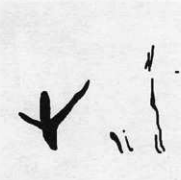
R12 (FRwE-No.25), 20cmh × 21cmw



R13 (FRE-No.27), 13cmh × 16cmw



R14 (FRwE-No.28), 27cmh × 18cmw



R15 (FRwE-No.32), 24cmh × 30cmw



R16 (FRwE-No.34), 7cmh × 10cmw



R17 (FRwE-No.36), 10cmh × 10cmw



R18 (FRwE-No.37), 11cmh × 12cmw



R19 (FRwE-No.39), 11cmh × 9cmw



R20 (FRwE-No.40), 9cmh × 12cmw, with red ochre



R21 (FRwE-No.43), 13cmh × 8cmw



R22 (FRwE-No.44), 8.5cmh × 7cmw, with red ochre



R23 (FRwE-No.45), 8cmh × 9cmw



R24 (FRwE-No.46), 8.5cmh × 7.5cmw



R25 (FRwE-No.47), 4cmh × 4.5cmw



R26 (FRwE-No.48), 13cmh × 14cmw



R27 (FRwE-No.53), 6.5cmh × 7.5cmw



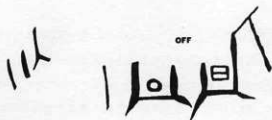
R28 (FRwE-No.57), 12cmh × 8.5cmw



R29 (FRwE-No.59), 7cmh × 11cmw



R30 (V1), 32cmh × 30cmw



R31 (V2), 35cmh × 95cmw



R32 (K1), 23cmh × 18cmw



R33 (K2), 17cmh×12cmw

Note:

北海道開拓記念館には「刻画のある石片」として、計60個の資料が所蔵されているが、今回の調査では、そのうち半数弱の29個の石片にしか明白な人為を認めることができなかった。石片はそれぞれきわめて断片的であり、部分的に人為とおぼしき線もあるかもしれないが、かたちを形成していないと判断した石片は、今回除外することにした。他に1970年の保護屋建設前の発掘で前庭部から発見され、現在フゴッベ洞窟内に展示されている2個(V1とV2)と「旧河野コレクション」の2個(K1とK2)も加え、計33個の石片と画像部分の描きおこしを掲載した。ただし、描きおこしは画像のある部分に限定したので、右の石片全体写真とは大きさが対応していないことをお断りしておく。R1などの最初の数字は、今回改めて付した資料固有番号であり、その次の括弧内のFRwE-1などという数字は、筆者の調査時の作業用番号である。サイズは、画像内のどの部分がひとつの作品であるとは、今回は判断していないので、右の写真に現れている石片の見える範囲の大きさを記したものにすぎないことを留意していただきたい。

R1は、現在北海道開拓記念館において常設展示されている。そのため表面が薬剤により強化されており、その際残存していたかもしれないベンガラは、現時点では確認できない。この石片の画像の主要部分は、VII-41とVII-44を合わせた部分とよく似ており、この2つのかたちの組み合わせに規則性のあることをうかがわせる。

R2の主要画像の胸部には広くベンガラが残存している。フゴッベ洞窟・岩面刻画の中でベンガラが残存している作品とは少しタイプの異なるかたちであり、このことは本来かなりの数の作品にもベンガラが充填されていた可能性を示している。おそらくこの石片は制作以降短期間のうちに剥落して堆積物に埋没したのだろう。「刻画のある石片」の中には、他にもR20とR22にも明らかにベンガラが残存していて、フゴッベ洞窟・岩面刻画内のベンガラ残存率をはるかにしのいでいることから、制作当初の姿を想像することはできそうである。

R13は調査時点でほぼ二つに割れていた。1970年「報告書」に掲載されている写真(第44図版1)では、まだ割れていない姿が写っているのだから、それ以降のいつかの時点で割ってしまったのだろう。フゴッベ洞窟・岩面刻画は水中火砕岩というきわめて脆弱な岩面に制作されているので、もともと壊れやすく、剥落時に落下の衝撃を受けてひびが入ったこともある上に、人為が加えられているため薄くなった部分で

破壊が進む危険性が高いといえる。石膏型は、現在細心の注意を払って管理されているが、今後新たな保存技術も駆使して更なる対策を講じる必要があるといえよう。

フゴッペ洞窟内に展示されていて、一般にも観察する機会が多いR30とR31に関しては、前者は多くの画像が見いだせるものの、それぞれ断片的な部分にとどまっていて、まとまったかたちを見出すことができなかった。何か大きな作品の一定部分であるとも考えられるが、現状からはそれを確認することができない。なお、このR30は現在の展示では写真と天地が逆になっていることをお断りしておく。他の石片に關しても、本来の天地を転倒させている可能性は否定できない。後者のR31は、幾何学的なかたちがアブレイジョンにより鮮明に残っていて印象的な石片であるが、右上部分が損傷していて、作品の全体像を明らかにすることはできない。主要部分は、おそらく方形の胴部を有する人物像が2体表現されているようにも思われるが、フゴッペ洞窟・岩面刻画の中に類例が見いだせないものなので、これ以上のことは今のところいえない。

R32とR33は、フゴッペ洞窟が最初に発掘調査される以前に、おそらく堆積土の表面において、発見された石片である。特にR32にはフゴッペ洞窟・岩面刻画に典型的な「有角」人物像であり、この作品からフゴッペ洞窟・岩面刻画の存在が知られるようになった記念碑的な作品であるといえよう。

補遺

(本文編第1部第6章・図版)

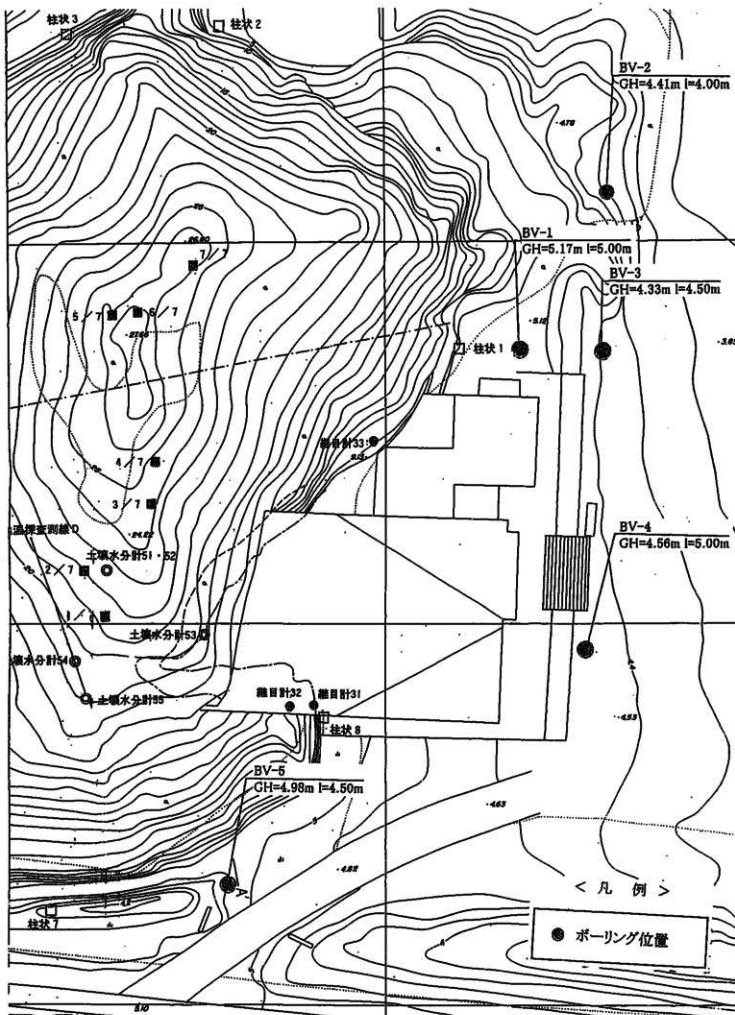
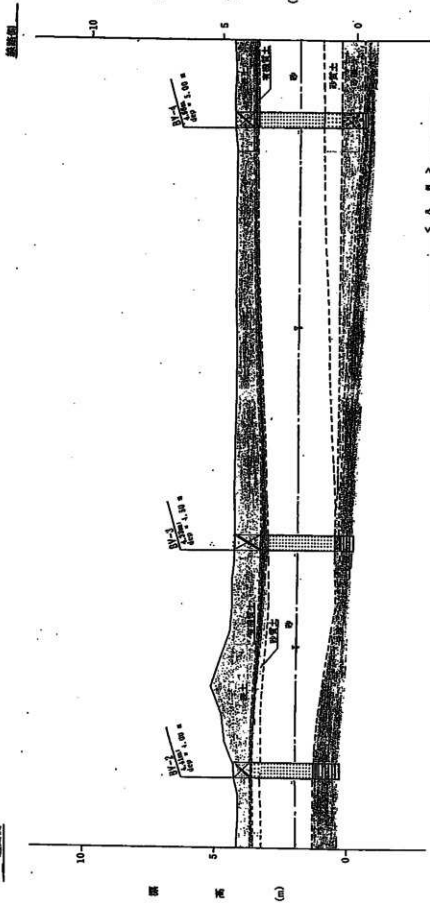


図1 ボーリング位置図(S=1:200)



< A A >

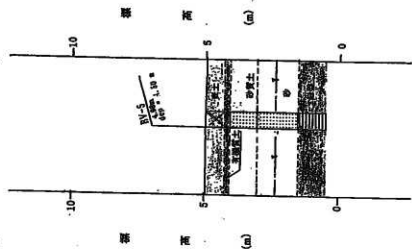
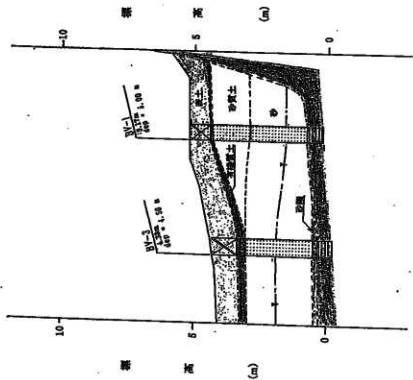
| | | | |
|----|------|----|-------|
| 地質 | 地層番号 | 層名 | 調査年度 |
| 地質 | 10 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 11 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 12 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 13 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 14 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 15 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 16 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 17 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 18 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 19 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 20 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 21 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 22 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 23 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 24 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 25 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 26 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 27 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 28 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 29 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 30 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 31 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 32 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 33 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 34 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 35 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 36 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 37 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 38 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 39 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 40 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 41 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 42 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 43 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 44 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 45 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 46 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 47 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 48 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 49 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 50 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 51 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 52 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 53 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 54 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 55 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 56 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 57 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 58 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 59 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 60 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 61 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 62 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 63 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 64 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 65 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 66 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 67 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 68 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 69 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 70 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 71 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 72 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 73 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 74 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 75 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 76 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 77 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 78 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 79 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 80 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 81 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 82 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 83 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 84 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 85 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 86 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 87 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 88 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 89 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 90 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 91 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 92 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 93 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 94 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 95 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 96 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 97 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 98 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 99 | 砂 | 昭和25年 |
| 地質 | 100 | 砂 | 昭和25年 |

----- 調査線
 - - - - - 境界線

図2 建物正面部の地質断面図 (S=1:100)

道路側

橋脚側



< A N >

| 材料 | 記号 | 説明 |
|--------|-----|--------|
| コンクリート | 100 | コンクリート |
| 砂 | 101 | 砂 |
| 土 | 102 | 土 |
| 石 | 103 | 石 |
| 鉄筋 | 104 | 鉄筋 |
| 鋼板 | 105 | 鋼板 |
| 鉛線 | 106 | 鉛線 |
| 銅線 | 107 | 銅線 |
| 銅線 | 108 | 銅線 |
| 銅線 | 109 | 銅線 |
| 銅線 | 110 | 銅線 |
| 銅線 | 111 | 銅線 |
| 銅線 | 112 | 銅線 |
| 銅線 | 113 | 銅線 |
| 銅線 | 114 | 銅線 |
| 銅線 | 115 | 銅線 |
| 銅線 | 116 | 銅線 |
| 銅線 | 117 | 銅線 |
| 銅線 | 118 | 銅線 |
| 銅線 | 119 | 銅線 |
| 銅線 | 120 | 銅線 |

----- 埋設部
----- 土質

図3 建物横部の地質断面図 (S=1:100)

縮尺 1:5,000

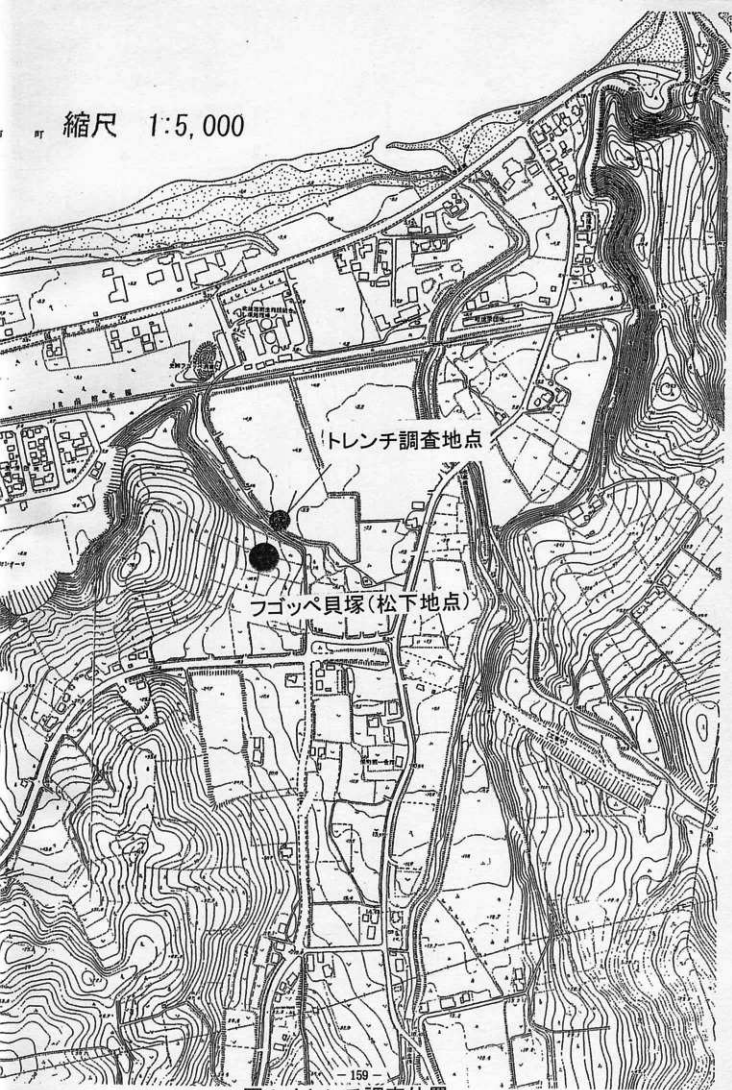


図4 トレンチ調査位置

地質断面図 (縮尺 1:200)

A' A

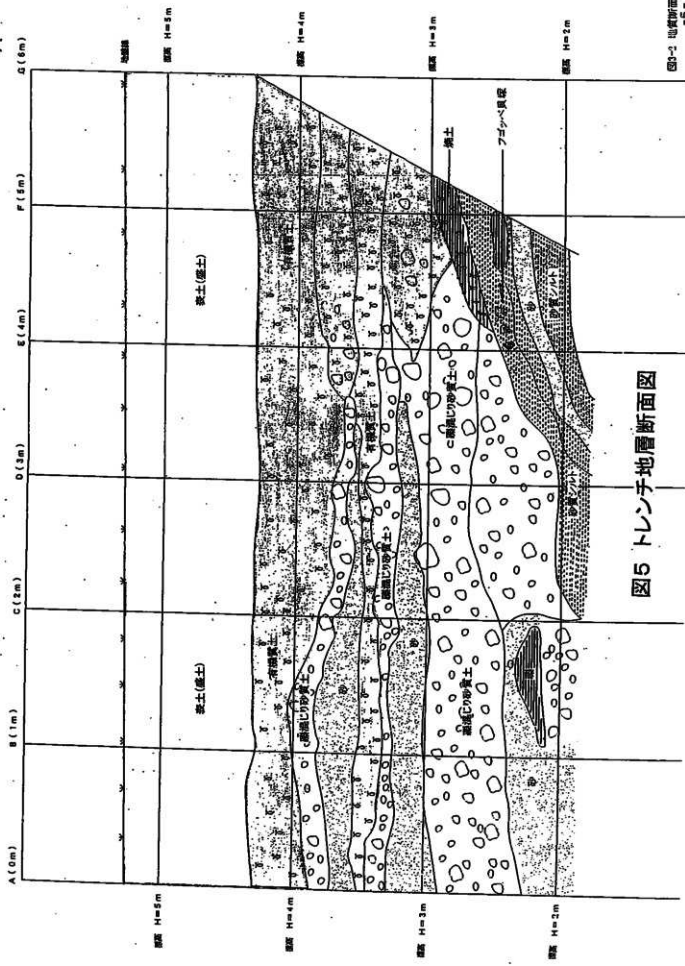


図5 トレンチ子地層断面図

| | | | | | | | | | | | | |
|-----|-------------------------|----|----|----|------|-------------------|----------------|----|-----------|-------------------------------|--------|-------|
| 6 | | | | | | B0 B1 | D0 D1 | | 撥文～北大Ⅲ | | | |
| 5-B | | | | | | B2 | D2 | | 北大Ⅱ | | | |
| 5-A | | | | | | B3 | D3 | C7 | | | | |
| 4-B | | | | | | B4 | D4 | | 後北C2-D | | | |
| 4-A | A1 | | | | | B5 | D5 | | (フゴッペ式) | 1410±40y.B.P (Beta-140910) | | |
| 3-B | A2 A3 A4 | 上層 | | | | B6 | D6 D7 D8 | | 後北C2-D | 1620±30y.B.P (Beta-140911) | | |
| 3-A | A5 A6 | 中層 | | | | B7 B8 B9 | D9 D10 | | 鈴谷 | 1590±30y.B.P (Beta-140912) | | |
| | | 下層 | | | | B10 B11 B12 | D11 D12 | C7 | 天王山(東北弥生) | 1670±30y.B.P (Beta-140913) | | |
| 2-B | A7 A'1 A'2 A'3 | | | | | | | | | | | |
| 2-A | A'4 A'5 A'6 | | | | | | | | 後北C1 | | | |
| 1-B | A'7 A'8 A'9 | | | | | | | | 後北B | | | |
| 1-A | A'10 A'11 | | | | | | | | | 1600±40y.B.P (Beta-140914) | | |
| 編年 | A | | D3 | C6 | C5 | C4 | B | | D2 | C7 | 出土土器形式 | 140年代 |
| | 洞窟前庭 | | | | 洞窟奥部 | | | | 発掘調査区 | | | |

表1 フゴッペ洞窟における層位対応表



0 10cm

図6 フゴッペ洞窟出土の鈴谷式(石附, 1976)

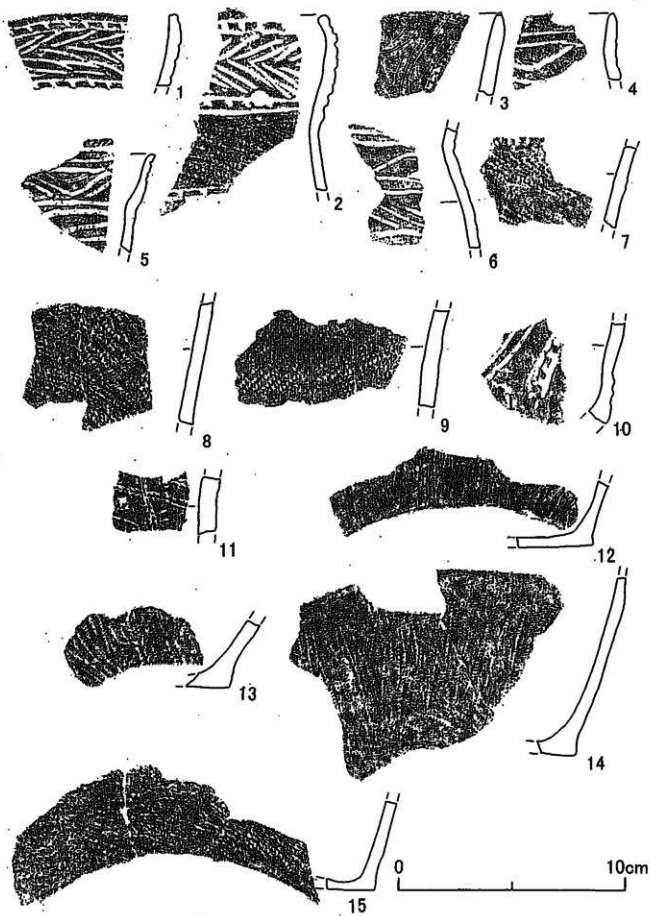


圖7 東北地方弥生系土器、鈴谷式土器

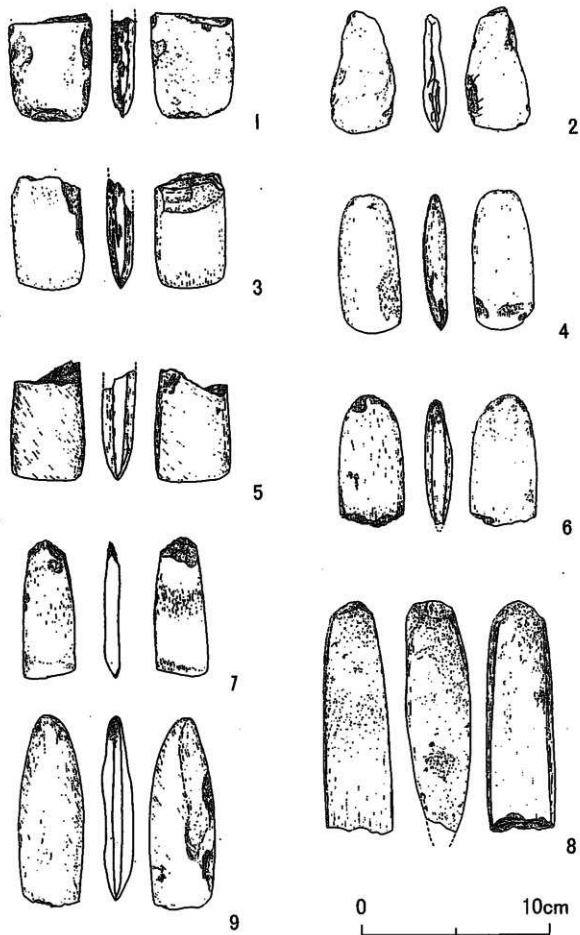
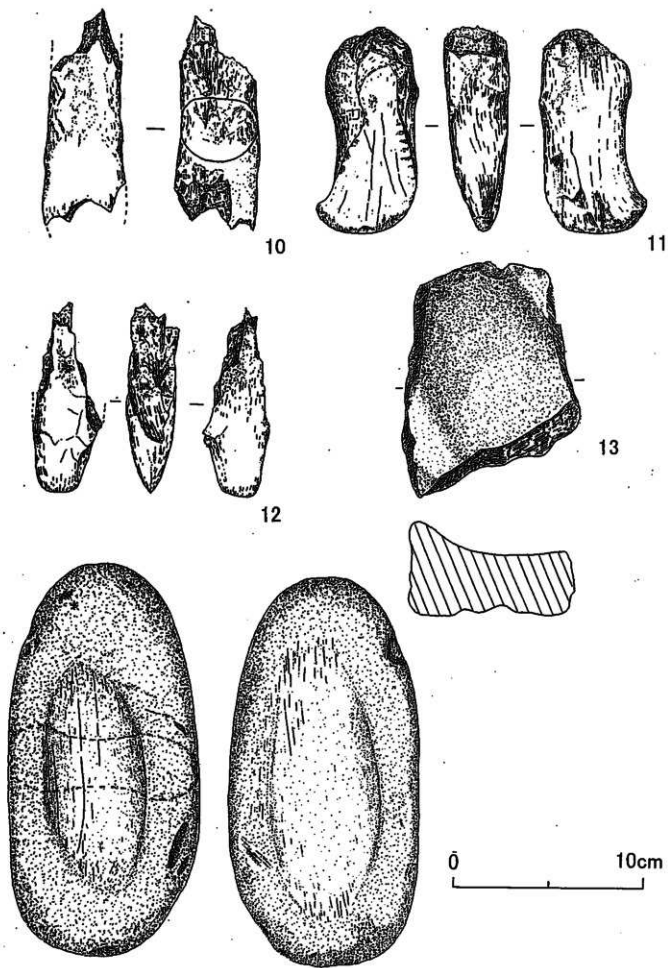


図8 岩面刻画を描く時に使用した道具



14
 図9 岩面刻画を描く時に使用した道具

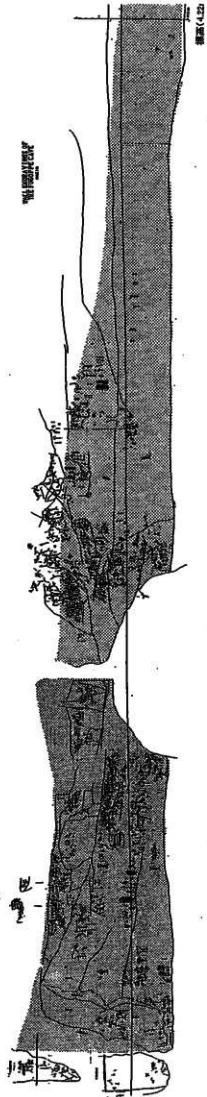


図10 河床内の堆積土

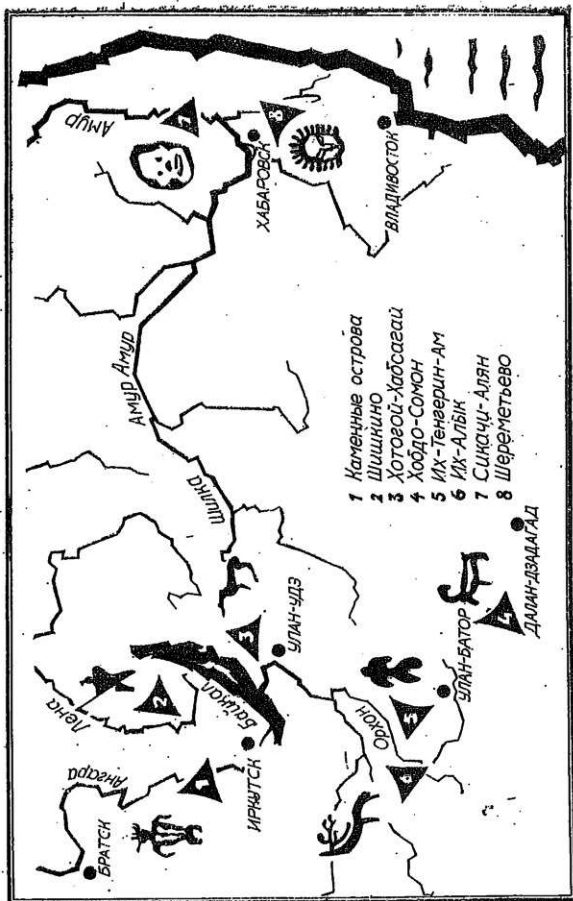


图 11 岩面刻画の分布 1

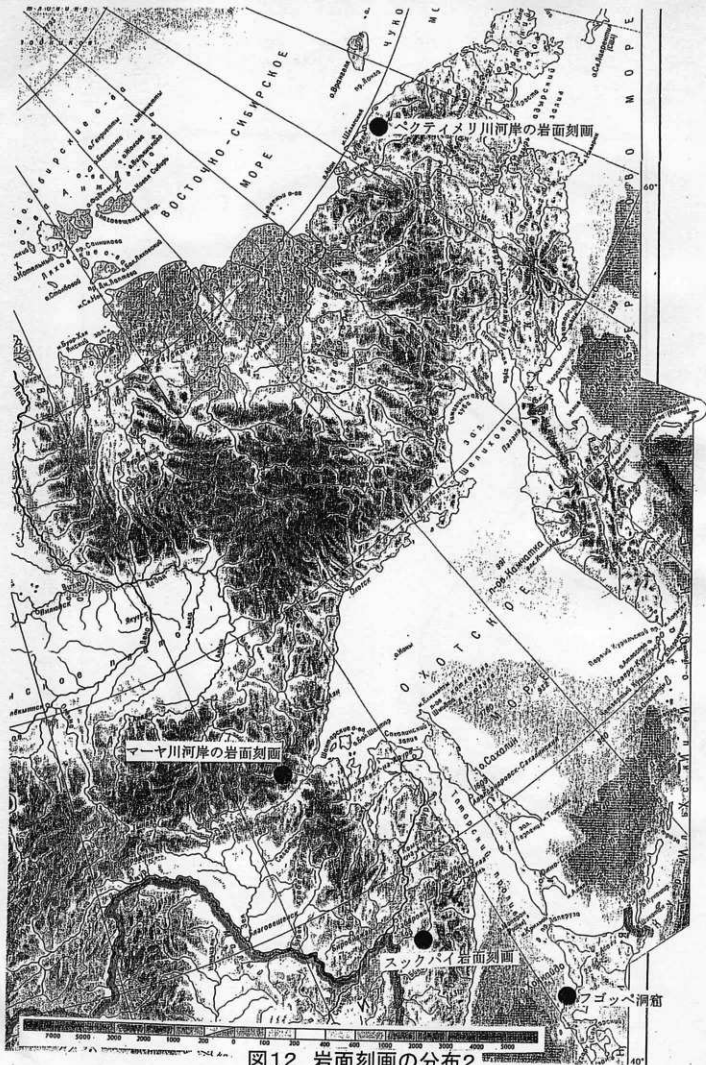
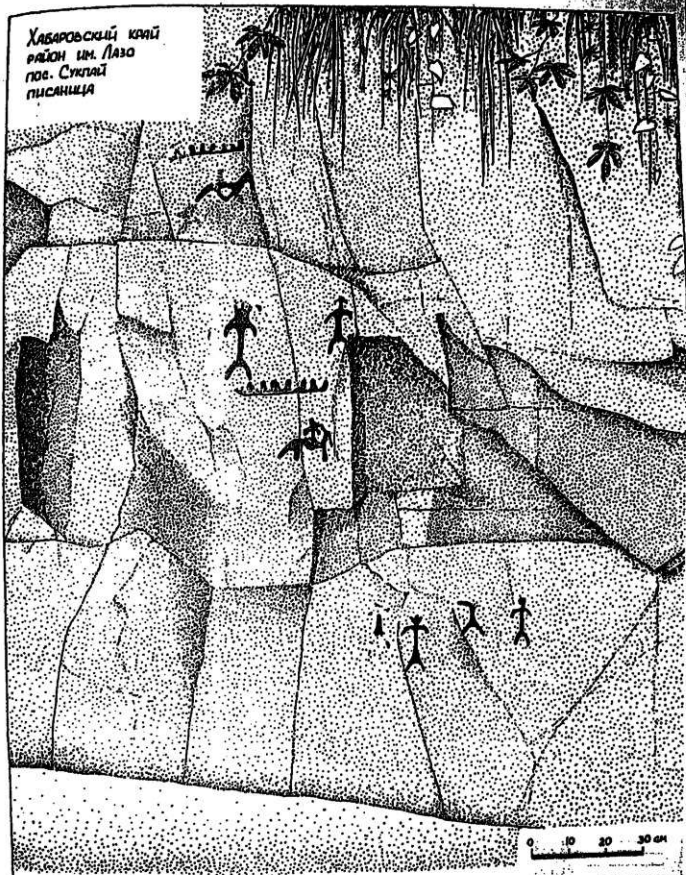


図12 岩面刻画の分布2

Хабаровский край
район им. Лазо
пов. Сукпай
писаница



Схематический план плоскостей с рисунками

图13 スックパイ岩面刻画

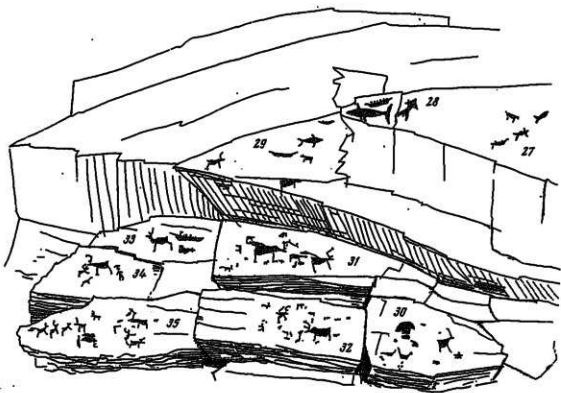
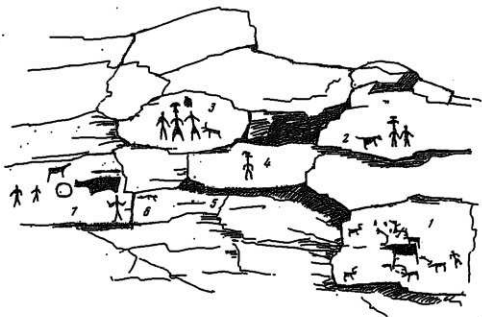


図14 ベクティメリ川河岸の岩面刻画

注

(本文編の注番号が「16」から「48」までになっているのは「17」から「49」までの誤植であり、「17」以下「49」までの注番号では「17(16)」のように示している。「17(16)」の場合、本文では「注16」と間違っているが、実際は「注17」であるということの意味している)

- 1 フゴッペ洞窟調査団(編) 1970 『フゴッペ洞窟』ニュー・サイエンス社
- 2 小川勝 1998 『フゴッペ洞窟岩面刻画の美術史的研究』(課題番号:07610056)平成7年度～平成9年度科学研究補助金(基盤研究(C))(2)研究成果報告書
- 3 フゴッペ洞窟調査団(編) 1970 前掲書
- 4 峰山巖(文)・掛川源一郎(写真) 1983 『謎の刻画 フゴッペ洞窟』六興出版
- 5 OGAWA, Masaru, 1992, *Rock engravings in Fugoppe Cave, Japan*, Rock Art and Ethnography (eds. Morwood & Hobbs), Australian Rock Art Research Association, 71-74
- 6 小川勝 1989 「フゴッペ洞窟の岩面刻画」『鳴門教育大学学校教育学会誌』第4号7-12
- 7 小川勝 1998 「北海道開拓記念館蔵フゴッペ洞窟岩面刻画石膏型資料評価」『北方の考古学(野村崇先生還暦記念論集)』野村崇先生還暦記念論集刊行委員会321-330
- 8 OGAWA, Masaru, 2000, *Evaluation of historical copies in plaster: petroglyphs from Fugoppe Cave, Japan*, paper read in the third AURA Congress, Australia.
- 9 小川勝 1998年「フゴッペ洞窟の岩面刻画:美術史的研究の可能性」『余市水産博物館研究報告』第1号 余市水産博物館27-31
- 10 小川勝 2000 「北東アジアの先史岩面画:朝鮮半島東南部の事例を中心に」『民族藝術』第16巻 33-40
- 11 諸氏 1997 『手宮洞窟シンポジウム:波濤を越えた交流・手宮洞窟と北東アジア・記録集』(「小樽の文化財」別冊)小樽市教育委員会
- 12 personal communication
- 13 朽津信明 2001 「フゴッペ洞窟の赤色顔料について」『余市水産博物館研究報告』第4号 余市水産博物館45
- 14 フゴッペ洞窟調査団(編) 1970 前掲書157
- 15 山田 治 1991 『年代測定. 余市町フゴッペ貝塚』財団法人北海道埋蔵文化財センター 553
- 16 フゴッペ洞窟調査団(編) 1970 前掲書
- 17(16) Ogawa, Masaru 2002 Bang-Dae as World Cultural Heritage *The Kyung-Sang Ilbo*, January 17th, 2002
- 18(17) 任昌淳(編著) 1984 『韓国金石集成1 先史時代』一志社(ソウル) 13
- 19(18) 黄壽永・文明大 1984 『盤龜臺:蔚州岩壁彫刻』東国大学校(ソウル) 211
- 20(19) 任昌淳 前掲書、13~14
- 21(20) 同上 40ページ
- 22(21) A.P.オクラドニコフ(加藤九非訳) 1968 『黄金のトナカイ:北アジアの岩壁画』美術出版社

- 23(22) 金元龍 (西谷正訳) 1984 『韓国考古学概説[増補改訂]』六興出版 79~81
- 24(23) 同上 126
- 25(24) 黄壽永・文明大 前掲書 146
- 26(25) 金元龍 前掲書 141~143
- 27(26) Son, Y. 1988 Prehistoric human-face petroglyphs of the North Pacific Ocean *Arctic Studies Center, supplement National Museum of Natural History: Smithsonian Institute*
- 28(27) 三上次男 1977 「北九州の裝飾古墳と韓国高靈の岩壁面」『日本歴史』344号 123~126
- 29(28) 李殷昌 1971 「高靈良田洞岩壁調査略報」『考古美術』(韓國美術史學會) 112号 24~40
- 30(29) 黄壽永・文明大 前掲書 243~245
- 31(30) 任昌淳 前掲書 42
- 32(31) 金元龍前掲書 266
- 33(32) 小川勝 前掲書「フゴッペ洞窟の岩面刻画: 美術史的研究の可能性」27~31
- 34(33) フゴッペ洞窟調査団(編) 1970 前掲書
- 35(34) 余市町編 1973 『史跡フゴッペ洞窟 保存工事報告』余市町
- 36(35) 峰山巖(文)・掛川源一郎(写真) 前掲書
- 37(36) フゴッペ洞窟調査団(編) 1970 前掲書
- 38(37) 同上
- 39(38) 同上
- 40(39) 同上
- 41(40) 同上
- 42(41) 峰山巖(文)・掛川源一郎(写真) 前掲書
- 43(42) 余市町編 前掲書
- 44(43) 同上
- 45(44) 峰山巖(文)・掛川源一郎(写真) 前掲書
- 46(45) 「一括資料」という概念については、小川勝 前掲書「フゴッペ洞窟の岩面刻画: 美術史的研究の可能性」を参照のこと
- 47(46) 土谷昭重 1993 「フゴッペ洞窟岩壁画一部画像の民族学及び民俗学資料による若干の考察」『北海道考古学』第29輯
大島秀俊 1996 「フゴッペ洞窟および手宮洞窟壁画の1考察」『北海道考古学』第31輯
- 48(47) フゴッペ洞窟調査団(編) 1970 前掲書
- 49(48) 諸氏 1997 『手宮洞窟シンポジウム』 前掲書
- 50 レプリカ法によるフゴッペ洞窟遺跡の岩面刻画の分析は、1998年「フゴッペ洞窟保存調査委員会」の依頼によってレプリカの作製とSEMによる分析を行い、1999年5月「レプリカ法から観察した岩面刻画の製作技法」として口頭発表している
- 51 大島秀俊 1991 「小樽手宮洞窟の陰刻壁面における製作技法について」『北海道考古学』第27輯
- 52 報文の形になったものは、関場不二彦 1931 「手宮土壁の所謂古代文字」(『報夷往来』1号)が初

出であるが、それ以前に北海道人類学会例会で発表をしている

- 53 『毎日新聞』1954年9月2日に金田一京助「手宮の古代文字」が掲載されたのに対し、9月21日に名取武光「手宮の古代彫刻—金田一博士の戯刻説に反対する—」が掲載されている
- 54 小樽市教育委員会 1991『史跡手宮洞窟—史跡保存修理事業に伴う発掘調査報告書』
なお、最下層の恵山式土器は摩滅が著しく、原位置を保ったものではなく洞窟が「乾いた状態」になった段階での堆積層での2次堆積と思われる。また、洞窟内の堆積は人為的な痕跡（削平、盛土など）はみられない
- 55 紙幅の関係で詳細な文献名などは省略させていただく。非礼をお許しいただきたい。手宮洞窟の研究史、関係文献についてはすでに「考古学・民族学から見た手宮洞窟」（『国指定史跡 手宮洞窟保存修復事業報告』小樽市教育委員会）1995年にまとめているので、それを参照いただきたい
- 56 E. Morse 1880 「Recent Literature」 (『American Naturalist』 vol.14)
- 57 渡瀬庄三郎 1886 「札幌近傍ピット其他古跡ノ事」 (『人類学会報告』 1号)
- 58 鳥居龍三 1913 「北海道手宮の彫刻文字に就いて」 (『歴史地理』 22巻4号) など。なお鳥居の研究については工藤雅樹が下記の論文で問題点の指摘をしている。工藤雅樹 1979『研究史 日本人種論』吉川弘文館
- 59 中目覚 1918 「北海道手宮洞穴の竊竊語誌」 (『歴史と地理』 1巻6号) など
- 60 主なものに喜田貞吉 1929 「北海道手宮洞窟内彫刻に就いて」 (『東北文化研究』 1巻6号)、中谷治宇二郎 1935 「北海道手宮の彫刻」 (『科学』 5-6) など
- 61 この当時の民間史学の動向は工藤雅樹氏の著作に詳しい。工藤前掲書
- 62 「上代」 1892 (『史海』 14巻)、工藤前掲書による
- 63 小矢部善一郎 1892 『成吉思汗ハ義経也』富山房 小矢部をはじめとする「作られた歴史資料」については、長山晴生 1998 『人はなぜ歴史を偽造するのか』新潮社などを参考としている
- 64 工藤修三 1935 「泊村発見の石に就いて」 (『岩宇郷土研究』 1-1)
- 65 For discussion see, for example, Thomas Heyd, "Rock Art Aesthetics: Trace on Rock, Mark of Spirit, Window on Land," *Journal of Aesthetics and Art Criticism*, Vol. 57, No. 4 (Fall 1999), 451-58. Also see Richard Bradley, "Rock Art and the Perception of Landscape," *Cambridge Archaeological Journal*, Vol. 1 (1991), 77-101; David S. Whitley, "Finding Rain in the Desert: Landscape, Gender and Far Western North American Rock-Art," and Richard Bradley, "Draggers Drawn: Depictions of Bronze Age Weapons in Atlantic Europe," in Christopher Chippindale and Paul S.C. Tacon, *The Archaeology of Rock Art* (Cambridge University Press, 1998), 11-29.

参考文献表

(本文で引用・言及されている文献、及び手宮に言及した主な文献と、フゴッペに直接言及した文献に限定して記載したため、網羅的な文献表とはなっていない。なお、韓国人の人名は日本語読みして、50音順に並べた)

- 朝枝文裕 1948 『手宮之古代文字』 千代田書院
- 浅枝文裕 1963 『彫刻と洞窟人』(郷土研究 No.6) 余市町教育委員会
- 浅枝文裕 1972 『北海道古代文字』 私家版
- 天野幸弘 2001 『発掘 日本の原像：旧石器から弥生時代まで』(朝日選書 667) 朝日新聞社
- 五十嵐鉄 1937 『史蹟手宮洞窟の新研究』 私家版
- 石附喜三男 1976 『鉢谷式土器の南下と江別式土器』『北海道考古学』第12輯
- 遠星北斗 1930 『疑ふべきフゴッペの遺跡』『コタン』私家版
- 丑野敏 1999 『千駄木遺跡における弥生土器の圧痕』『千駄木遺跡』Occasional Papers No.8 国際基督教大学考古学研究センター
- 丑野敏 2001 『レプリカを用いた考古遺物の解析』『真蹟のはざま[デュシャンから遺伝子まで]』(西野嘉章編) 東京大学総合研究博物館
- 右代啓視 1996 『「砂丘」と人、地形と地質』『さっぽろ文庫』77
- 右代啓視 1996 『「ムム」と人、地形と地質』『さっぽろ文庫』77
- 右代啓視 2001 『北方諸地域における温暖期の存在と意義』『北海道考古学2001年度研究大会「北方文化交流を探る」』
- 右代啓視 2001 『フゴッペ洞窟岩面刻画と出土資料』『本郷』No.33
- 右代啓視・赤松守雄・山田悟郎 1992 『積丹半島における洞窟遺跡とその地質学的意義』『北海道開拓記念館研究報告』第12号
- 右代啓視・下川浩一 1997 『大成町貝取巻洞2洞窟遺跡の年代とその特性』『北海道開拓記念館調査報告』第36号
- 黄壽永・文明大 1984 『盤龜臺：蔚州岩壁彫刻』東国大学校(ソウル)
- 太田岩太郎 1931 『小樽古代文字に就て』『北方時代』第2巻3号
- 大島秀俊 1991 『小樽手宮洞窟の陰刻壁画における製作技法について』『北海道考古学』第27輯
- 大島秀俊 1995 『フゴッペ洞窟および手宮洞窟壁画の1考察』『北海道考古学』第31輯
- 大島秀俊 1996 『手宮洞窟シンポジウムの成果と研究の展望』『北海道の文化』第68号
- 大塚和義 1967 『刻みつけれられた船 フゴッペ洞穴における岩壁画の歴史的背景』『歴史研究』5
- 小川勝 1989 『フゴッペ洞窟の岩面刻画』『鳴門教育大学学校教育学会誌』第4号
- 小川勝 1998 『北海道開拓記念館蔵フゴッペ洞窟岩面刻画石膏型資料評価』『北方の考古学(野村崇先生還暦記念論集)』野村崇先生還暦記念論集刊行委員会
- 小川勝 1998 『フゴッペ洞窟の岩面刻画：美術史的研究の可能性』『余市水産博物館研究報告』第1号

- 小川勝 1998 『フゴッペ洞窟岩面刻画の美術史的研究』 (課題番号: 07610056) 平成7年度~平成9年度科学研究補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書
- 小川勝 2000 「北東アジアの先史岩面画: 朝鮮半島東南部の事例を中心に」 『民族藝術』第16巻
 オクラドニコフA.P.(加藤九幹訳) 1968 『黄金のトナカイ: 北アジアの岩壁画』 美術出版社
- 小樽市教育委員会 1991 『史跡手宮洞窟-史跡保存修理事業に伴う発掘調査報告書』
- 小樽市教育委員会 1995 『国指定史跡 手宮洞窟保存修復事業報告』
- 小矢部善一郎 1892 『成吉思汗ハ経也』 富山房
- 開拓史 1981 「石文」 『北海道誌 巻十・地理・名跡』 大蔵省
- 飯沼照三 1962 『あけゆく後方羊蹄』 私家版
- 喜田貞吉 1929 「北海道手宮洞窟内彫刻に就いて」 『東北文化研究』 1巻6号
- 金元龍(西谷正訳) 1984 『韓国考古学概観[増補改訂]』 六興出版
- 金田一京助 1930 「アイヌのイクトバの問題」 『人類学雑誌』 45巻4号
- 工藤修三 1935 「泊村発見の石に就いて」 『岩宇郷土研究』 1-1
- 工藤雅樹 1979 『研究史 日本人種論』 吉川弘文館
- 國分直一 1992 『北の道 南の道: 日本文化と海上の道』 第一書房
- 国立歴史民俗博物館 1999 『新弥生紀行: 北の森から南の海へ』 朝日新聞社
- 駒井和愛 1952 『アイヌの貝塚』 福村書店
- 舘氏 1950 『史蹟手宮洞窟古代文字』 小樽市教育課
- 舘氏 1997 『手宮洞窟シンポジウム: 波濤を越えた交流・手宮洞窟と北東アジア・記録集』 (「小樽の文化財」別冊) 小樽市教育委員会
- 舘氏 2001 『余市水産博物館研究報告』第4号 余市水産博物館
- スベヴァコフスキーA.B.(下村五三夫・訳) 1994 「アイヌ民族による択捉島の岩面線刻記号について」
 『Language Studies』 第2号 小樽商科大学言語センター
- 関場不二彦 1931 「手宮土壁の所謂古代文字」 『蝦夷往来』 1号
- 土谷昭重 1993 「フゴッペ洞窟岩壁画一部画像の民族学及び民俗学資料による若干の考察」 『北海道考古学』 第29輯
- 土谷昭重 1998 「北海道開拓記念館蔵余市町フゴッペ洞窟岩面刻画 Rock Engravings 石音資料調査の概略な報告」 『北方の考古学(野村崇 先生還暦記念論集)』 野村崇先生還暦記念論集刊行委員会
- 坪井正五郎 1896 「北海道手宮に於いて発見されたる古代彫刻」 『史学雑誌』 7編4号
- 寺田貞次 1926 『小樽史蹟 手宮古代文字 附 忍路環状石庫』 左文字堂行
- 鳥居龍三 1913 「北海道手宮の彫刻文字に就いて」 『歴史地理』 22巻4号
- 長山靖生 1998 『人はなぜ歴史を偽造するのか』 新潮社
- 中目覚 1918 「我国に保存させられたる古代土耳其文字」 『尚古』 71
- 中目覚 1918 「北海道手宮洞穴の鉄網器墓誌」 『歴史と地理』 1巻6号

- 中谷治宇二郎 1935 「北海道手官の彫刻」 『科学』 5-6
- 名取武光 1951 「北海道フゴッペ洞窟の発掘」 『民族学研究』 16巻2号
- 名取武光・松下直 1968 『手官洞窟岩壁彫刻の研究史』 小樽市博物館
- 鳴門教育大学・パブリックコンサルタント株式会社 1999 『平成11年度 フゴッペ洞窟岩面刻圖の総合的研究 報告書』
- 西田彰三 1928 「フゴッペの古代文字並びにマスクについて」 『北海道教育』 113
- 野村崇・他 1992 「北海道フゴッペ洞窟出土の土器(1)」 『北海道開拓記念館調査報告』 31
- 野村崇 1997 『日本の古代遺跡 41 北海道Ⅱ』 保育社
- 野村崇 2000 『北の考古学散歩』 北海道新聞社
- 任昌淳(編著) 1984 『韓國金石集成1 先史時代』 一志社(ソウル)
- 樋口忠次郎 1935 「手官古代文字について」 『北海道倶楽部』 第2巻 第7号
- フゴッペ洞窟調査団(編) 1970 『フゴッペ洞窟』 ニュー・サイエンス社
- 三上次男 1977 「北九州の装飾古墳と韓国高靈の岩壁画」 『日本歴史』 344号
- 水口忠 1992 『おたる歴史ものがたり 改訂版』 北海道教育社
- 峰山 巖・他 1972 『フゴッペ洞窟発掘調査概報』 余市町教育委員会
- 峰山巖(文)・掛川源一郎(写真) 1983 『謎の刻圖 フゴッペ洞窟』 六興出版
- 藤雅夫 1951 「フゴッペ洞窟と大陸文化との関係」 『民族学研究』 16巻2号
- 藤雅夫 1954 「手官古代文字戯作説について」 『歴史家』 第4号
- 山田 祐 1991 『年代測定・余市町フゴッペ貝塚』 財団法人北海道埋蔵文化財センター
- 余市町(編) 1973 『史跡フゴッペ洞窟 保存工事報告』 余市町
- 李殷昌 1971 「高靈良田洞窟調査略報」 『考古美術』 (韓國美術史學會) 112号
- 波瀨庄三郎 1886 「札幌近傍ピット其他古跡ノ事」 『人類学会報告』 1号
- Bradley, R. 1991 Rock Art and the Perception of Landscape *Cambridge Archaeological Journal*, Vol. 1
- Bradley R. 1998 *Drillers Drawn: Depictions of Bronze Age Weapons in Atlantic Europe The Archaeology of Rock Art* (Christopher Chippindale and Paul S.C.Taçon eds.) Cambridge University Press
- Whitley, D. 1998 *Finding Rain in the Desert: Landscape, Gender and Far Western North American Rock-Art The Archaeology of Rock Art* (Christopher Chippindale and Paul S.C.Taçon eds.) Cambridge University Press
- Heyd, T. 1999 *Rock Art Aesthetics: Trace on Rock, Mark of Spirit, Window on Land Journal of Aesthetics and Art Criticism*, Vol. 57, No.4
- Martynov, A.I. 1991 *The Ancient Art of northern Asia* University of Illinois Press
- Milne M. 1980 Notes on stone implement from Otaru and Hokkaido, with a few remarks on the prehistoric remarks of Japan *Transactions of the Asiatic Society Japan* Vol.8
- Morse E. 1880 Recent Literature *American Naturalist* vol.14

- OGAWA, M. 1992 Rock engravings in Fugoppe Cave, Japan *Rock Art and Ethnography* (Morwood & Hobbs eds.), Australian Rock Art Research Association
- OGAWA, M. 2000 Petroglyphs from Fugoppe Cave (Japan) in the context of North-Eastern Asian rock art, paper read in the third AURA Congress, Australia
- OGAWA, M. 2000 Evaluation of historical copies in plaster: petroglyphs from Fugoppe Cave, Japan, paper read in the third AURA Congress, Australia
- Okladnikov, A. 1981 *Ancient Art of The Amur Region: Rock Drawings, Sculpture, Pottery* Aurora Art Publishing
- Son, Y. 1988 Prehistoric human-face petroglyphs of the North Pacific Ocean *Arctic Studies Center, supplement* National Museum of Natural History: Smithsonian Institute
- Torii, R. 1919 *Études Archéologiques et Étymologiques. Les Ainou des Îles Kouriles* Imperial University of Tokyo

(索引は割愛した)